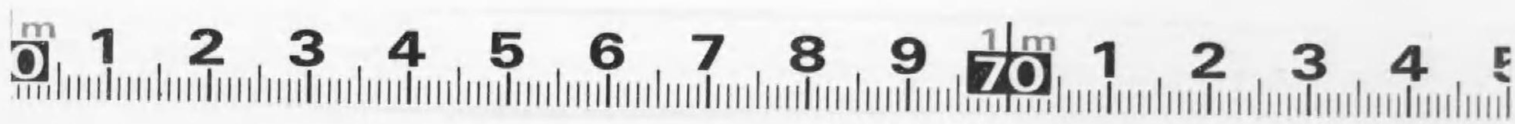
522
284



蕉芭るたせ瘦に詩

上野松峯著

詩に痩せたる芭蕉

小西書店

大正
13.6.28
内交

522-284

序

濃密な狹霧の流れる秋白い曉に、日光山上の中禪寺湖畔に立つたことがある。岸近くでも、七八尺の深さはあるやうに思へたが而も水色は硝子のやうに、薄青く澄み切つて、底に生ふる藻の纖維までが、游いで居る鮠の細鱗までが、鮮かに讀めるほどの清らかさであつた。斯のやうな透徹した湖水などを見る毎に、おのづと聯想に上り來るものは、詩人芭蕉の住して居た其の心境である。

我が國土にも、古來文の人は多いが、露に洗はれて、身顫ひする竹の葉のやうな、爽かな心姿を提げて、天地自然の裡に直入し物我一如の三昧境に涵り了して、自己の詩をして、殆んど自己の宗教に近いまでになし得たものに至つては、先にしては西行、後にしては此の芭蕉ぐらゐのものであらう。

歐州の或る哲人は、『周圍無き中心』といふ、禪宗の公案のやうな詞句を遺して居るが、芭蕉の一生に於ける精進は、詩人の完成であると共に、人性として到達し得べき、最高處にまで自己を研澄して所謂『周圍無き中心』に靜坐したものである。

言葉は沈默に到るを以て極致とし、色彩は純白に到るを以て、極致とするといふ。芭蕉は其の生涯を通じて、幾多の詩と言葉とを遺した。併しながら、具さに其の心の跡を味索すると、或る意味に於て、彼の菩提寺たる義仲寺眞愚上人の謂ゆる『五十一年、一字不說』である。

大正十三年初夏　　著者

詩に痩せたる芭蕉

上野松峯著

一

まだ眠の影の淡く澱んで居る寢覺の頭を、固い握拳でガンと撲られた時のやうな心持がした。春の柔かな土を踏みながら、椿の花の落ちる靜かな音でも聽いて居るところを、不意に背後から突きのめされでもした時のやうな感じがした。――それは主人の藤堂良忠に俄かに死なれてしまつた際の、松尾宗房（おはふさ）の若い胸に響いた驚であつた。

伊賀の城代家老として構へられた、可なりに廣い邸内は、黑い幕でも垂れ下げたやうに、陰氣に靜まりかへつて、家中の人々は何れも顏を暗くして居る。白絹で蔽はれた主人の柩の置かれてある室は、一番奥の、中庭に面した廣間なのだが、線香の煙や、蠟燭の燃える匂が、どの室にもどの室にも、しんみりと這ひ流れて、幾曲りもした長い廊下には、下婢などが、足音肅かに行つたり來たりして居る。

チーンと賴り無げに鉦が鳴る。啜り上げるやうな讀經の哀音が聞える。鉦の音、讀經の聲の一刻み毎に、彼は、自分と主人との距離が、だん〳〵遠ざかつて行くやうな氣がする。

良忠公は亡くなられたのだ。いくら耳元へ口を寄せて、聲の限りにお呼び申しても、目も開かれねば、微笑も浮べられず、冷たい肉となつて、棺の中に納められてあるのだ——と思ふと、彼は、白晝眼をあいたまゝ、忌はしい夢を見て居るやうな心持がした。闇の中に追ひ落されて、後戸をピッシャリと締め切られたやうな心持

がした。彼は、この、鐵の扉のやうな冷たい重苦しい事實に當面しながら、今更のやうに、永年の間、主人から受けた恩誼を思ひ出さずには居られなかつた。

最う十幾年前といふ昔のことになる。宗房が初めて此の藤堂家に仕へるやうになつた當時は、今度亡くなつた良忠は、まだ部屋住みの若君て居たのだ。そして其のお側附の小姓に採用された彼は、更にそれより年下の少年であつた。

今日からは毎日御屋敷に上つて、若樣のお側に勤めるのだと思つた時には、子供心にも新生面に接する珍らしさと、何とはない怖さとに、小さな胸をときめかしながら、朝も平常よりは早く起き出したことを、今てもよく記憶して居る。

總角（あげまき）の髮を、母にすが〳〵しく整へて貰つて、襞のきつぱりとした袴を穿き、肩揚げの深い薄紫の紋服を着て、兄に連れられて、赤阪町の自分の家を出て、東西兩側の民家の間を、此の屋敷の方に歩いて來た時には、面（おも）はゆい心持がしたのであつた。彼は、過ぎた昔の、無邪氣な自分の小姓姿までを胸に浮べた。

兄は、其の以前から、藤堂家の侍であつたので、時には話のついてなどに、「殿様」といふものや、邸内の様子などを聞かされたこともあつたが、目のあたり見るのは、其の日が初めてゞあつた。

現在ては見馴れてしまつたが、其の朝の目に映じたものは、總てが際立つて大きく立派に見えた。屋敷の周圍は、分厚な築地塀で取りかこまれ、乳房の形した金具の打たれた冠木門の扉は、ゆつたりと左右に開かれて、正面の玄關までの間には、一粒々々に選つたやうな、綺麗な球石が、矢張り今と同じに敷詰めてあつた。向つて左寄りに、別に小玄關が設けてあつて、それを入ると、とつゝけの廣間が、家中の人々の詰所になつて居て、多くの侍衆が控へて居た。壁際の刀架には、鞘のかぶつた槍、又又、伊賀棒、太刀などがかけられてあつた。

間敷はどれほどあるのか、構造はどんな風になつて居るのか、案内は知れなかつたが、門を入る時、外部から見た屋甍の大體から見ても、邸内の廣さは略ぼ想像さ

れた。これまて兩親の膝元にばかりゐて、世間を知らなかつた少年の宗房は、初めて斯ういふ馴れない空氣の中に入つて、何となく威壓を小さな胸に感じながら、兄の側に寄添つて、行儀よく坐つたのであつた。

兄は、それ〴〵の人と、相當の挨拶を交はしながら

「これが私の弟です。今日から若様のお側に勤めることになつたのですが、何分まだ御覽の通りの若年者て、一向辨へもありませぬから、今後はどうぞ宜しくお引廻しを願ひます」

と頼んだのであつた。居合はせた人々は、何れも顔を柔らげて、宗房の方を見ながら、快い返事をして呉れたのであつた。中には

「よいお小姓ぢや、お幾つかな」

などゝ言つて呉れる人もあつた。

「行く〳〵は立派なお侍になることだ」

と、肩に手をかけたりする人もあつた。それにつけ、此時ぐらゐ介添の兄を頼もしい人に思へたことはなかつた。

二

奥向の人に導かれて、綺麗に拭きぬかれた長い廊下を通つて、若樣であつた良忠にお目見得すべく、一室の襖は静かに開かれた。小さな胸は動悸した。蛙の這ひつくばつたやうに、兩手をぎごちなくついて、頭を垂れた宗房のほてる耳元に、先づ柔らかに入つたものは「末永く勤めて呉れ」といふ、調子の應揚な言葉であつた。上氣した心持で、身を起して正面に目をやると、六七尺ほどあひだを置いた上座に、

色の白い眉のすつきりとした良忠が、黒い髪を匂はしくきりつと結つて、何といふ品物が知れないが、立派な衣服を着て、物優しい表情をして、此方に目を注いで居るのであつた。

宗房の視線が、良忠の視線となだらかに落合つた刹那、宗房は今まで何となしに抱いて居た一種の威壓から、譯も無く解放されてしまつた。自分の手を握つて呉れるべく　其處に温い手が差延べられてあるやうな安堵を與へられて、言ひ知れぬ和親の情を胸に湧かした。

あとで知つた名稱だが、雲間縁の新らしい疊の敷かれた、瀟洒とした其の座敷には、銀拵への反の深い細太刀、重藤の牛弓、南畫の山水の掛軸、菊透しの罩蓋の冠つた香〻、載せた和本の影を倒映する光澤のある黒檀の文机。斯うした調度類が、按配よく室内に配直されて、品のよい落つきを見せて居た。

幅の廣いどつしりとした襖が、ゆるやかに開かれて、良忠の部屋に入つて來たの

は、頭髪を大髻（おほたぶさ）に結つて、紋のついた黒い羽織を着流した、侍の偉さうな人であつた。良忠は會釋した。宗房も叮嚀に兩手をついた。扈從の人は平伏しながら、宗房のことを仔細に告げた。それは父殿樣の良精であつた。良精は輕く心易げに肯きながら、宗房を見て

「よい兒だ、生涯見忘れずに、若の爲に盡して呉れよ」

と言つた。そして更に良忠に向つて

「阿兒（あこ）は良い家來を持つたな」

と一言洩したなりて、間も無く部屋を出て行つてしまつたのであつた。

これまでは「殿樣」とか「若樣」などゝいふと、どうやら人種でも異つて、目鼻立や音聲までが、並の人とは違ふ、一種異樣の人のやうな、特別な感じの下に、取止めの無い畏怖を、宗房は抱いて居たのであつたが、斯うして直接會つて見て初めて、殿樣といつても、若樣といつても、矢張り變りのない人なのだ、優しい方々なのだ――といふ安易な心持を得ることが出來て、或る親しさの裡に溶けたのであつた。

けれども斯うした思ひ出も、今では最う十餘年前のことになつてしまつたのだ。

三

五六年前に、良忠が當主として立つことになつた時には、宗房も既に元服した後で、髪の結ひ方から、服裝から、心持までが大人びて來たが、其の間も常に主從の仲には、水も洩さぬほどの親密さが保たれて居た。影の形に伴ふやうな、響の物に應ずるやうな共鳴が、何時も變り無く兩者の間に温く保たれて居た。恰も河魚が淡

水によつて、海魚が潮水によつて、些の不自然さも無く、其の中に生れながらにして棲息するやうに、宗房は良忠に、主人として仕へることによつて、自分に天賦されたものゝ、相適ふことを覺り知つて居た。

水際立つた風采の、良忠の若い殿樣振と、鷹揚な閑雅な其の性格とは、何時とはなしに宗房の風骨までを董化して、このために宗房自身までが、白馬銀鞍に跨つて、長安の街上に珊瑚の細い鞭をあげた貴公子のやうな、心持に躾けこられて來たのであつた。

殊に宗房が、青蕪の中に一輪の白い花でも見つけた時のやうな、奥床しい感じを、良忠の裏に見出したことがあつた。それは良忠が只型に嵌つた「城代家老」といふだけの人物ではなくて、風流を解して居る人であると見た時であつた。それはつまり、宗房の胸奥の深部に、生れながらにして、祕かに培はれて、而もまだ夜明前のやうに現はれずに居る詩人の萌芽が、ゆくりなくも主人の風懷と、期せずして相觸

れた時の、心の濕潤であつた。

土地は帝京に近く、東海道十五ヶ國の首に列なり、而も鈴鹿、布引などを主脈とした山巒によつて、四邊を圍まれ、一の仙境をなして居る此の伊賀の風色は、詩情を唆るに十分であつた。良忠は閑暇の折々に、よく近郊を散策した。宗房はいつもこれに隨つた。

綠の滴るやうな巖倉の峽に行つたこともある。涼しい赤目ヶ瀧を探つたこともある。時には難路を名張川の邊にまで行つて、梅花疎々、田舍離々といふ風景に接したこともある。白鳳城の北へ、東から流れて來る服部川原に行つて、清らかな水色に心を洗つたこともある。良忠は能く是等の物象を取入れて句作をした。そして吟句を書集めては、豫て師事して居る、京都在住の北村季吟の許に屆けて、添削をして貰ふことにして居た。其の使者の役は、いつも宗房にさまつて居た。從つて是までに宗房は、伊賀と京都との間を、幾度往復したか知れない。

或時は伊賀と近江と山城との國境をなして居る、三國嶽の山襞に、まだ殘雪の斑らにあるのを、遙かの空間に眺めながら、寒梅の痩せて疎らに咲いて居る、早春の里道を行つたこともあつた。春嵐吹く五月晴の空に、大まかな曲線を引いて居る笠置の山容を仰ぎながら、其の麓を歩いたこともあつた。青葉の堆く繁つて居る木津川の谿流を通つたこともあつた。

宗房の天賦の詩想は、まだ深く内に潜んだまゝに、而も良忠の風懷に觸れ、また目のあたり接する天地自然の默示に育まれて、すく〳〵と生長しつゝあつたのだ。

斯うして青年となり來つた宗房が、女性のことで、少なからず良忠に心配をかけたことがある。分けても其時ぐらゐ、彼が主人の温情に感激したことはなかつた。

四

國の中央に位する城内には、良忠と同族の藤堂家が、藩主としてこれに據つて居た。二年前の、春も漸く深くなりかけた頃であつた。城内に花見の宴の催されたことがある。それに招かれて行く良忠に、宗房も扈從した。

大手口を南に構へた城内には、若草が青々と萠えて、この城に特有と思はれるほど豐富にある、椎や椿の常綠樹は、いよ〳〵葉の光澤を增して繁り合ひ、地の膚には麗かな陽光が滲透して、ふつくりと盛り上つて見えた。

天主臺の附近には、殊に櫻が多かつた。幹から幹には、幔幕などが張り渡された皮膚の若々しく艶やかな腰元達は、眞晝の日射しに、顏をほんのりと上氣させて、桃色の衣裳に黑の帶といふ揃ひの扮裝で、白い脛に裾を捌きながら、酒器や蒔繪の重、其の他の調度類を運ぶのであつた。

天候を選んで催された花見の宴だけに、其の日は殊に麗かで、正午に間もないと思はれる頃は、たゞ眠として居てさへ、肌に輕い汗ばみを覺えるほどの暖かさであ

つた。簇がり重なる櫻の枝からは、花香が薄く流れて、羽虫などが飛んで居た。

無禮講といふことで、平素の堅苦しい挨拶は省かれた。人々は心置きなく酒盃を交はし合つた。時の移るにつれて、常には黑塗鞘の大小などで四角張つて居る侍衆の舌も縺れて來た。中には白扇で掌を叩きながら、朗らかな聲をあげて、謠曲などをやる人もあつた。若黨や足輕などまでが、顏を眞赤にして、足をよろ〳〵させながら、無器用に舞の眞似などをして人を笑はせた。

連日の暖氣に蒸された枝毎の花といふ花は、開けるだけ開き、盛り上るだけ盛り上つてしまつて、最う此の上は、自制するに堪へないといつた風に、碌々風といふほどの風も無いのに、ハラ〳〵と無性に散つて、置かれた酒盃、侍衆の鬢髮、腰元共の衣袂、毛氈の上、地の面、悉く花吹雪に白くなつた。夕暮も過ぎて、宴はとう〳〵夜にまで亘つた。

月は忍ぶやうに、朧ろに空に懸つて、四邊は夢幻畫のやうな光景を呈して來た。

木立を透して、久米、友生の峯巒が茫と浮んで見える。點された雪洞の灯影は、とろりと眠さうに春宵に瞬いた。人々はそれ〴〵酩酊して、座間の調子が大分亂れて來た。

宗房も矢張り其の席に居たのであつた。これまで正月に、僅かに盃淺く屠蘇を祝つたぐらゐのもので、殆んど酒についての經驗の無い彼は、咽るやうな其の場の酒の香だけでも、醉ひ心地になつたのに、執拗く他にすゝめられたりして、退引ならずに盃を受けねばならぬこともあつた。努めて口にすることを避けてはゐたが、それでも何時の間にか、醉つてしまつて、今までに覺えの無い陽氣な心持になつたやうであつた。ところが間も無く、後頭がズヤン〳〵と痛み出し、眼玉はクル〳〵廻るやうな、胸は押へつけられるやうな、何とも言へぬ鈍重な不快を感じて來た。

顏に濡手拭でも當てゝ見たならば、醉はなかつた前のハツキリした心持に歸れるかも知れぬと思つて、彼は何氣なしに一座から離れて、木立の彼方に灯影の見える

舘の下手の方へ歩いて行つた。ところが足元が確かでなかつたせいか、樹木の下枝に袴の裾を引つかけて、ビリ、と裂いた。手に摘み上げて見ると、五六寸ほど縫目が綻びて居る。困つたことをしたと思ひながら、試みに歩いて見ると、脚を前に運ぶ毎に、あらはに腔が出て、甚だ不體裁だ。綻びた箇所を握つて見たり、歩き方をいろ〳〵にして見たりして、愚圖々々して居るところへ、彼方からすた〳〵と草履穿きで來たものがある。それは宗房が、主人の登城毎について來て、豫て見知り越しのお雪といふ腰元であつた。

彼女は其處に人影があるので、フト立止まり加減にしたが、透し見るやうに宗房の側によつて來て、春の夜色を僅かに隔てながら

「松尾樣でございますか、どうかなされましたか」

と言葉をかけた。

「袴の裾を綻ばして――」

と彼は言つた。お雪は腰をかゞめて、宗房の袴の裾を手にとつた。

「雜作ありません。直して上げませう」

姉が弟の身のまはりでも見てやるやうな氣輕な調子で、お雪は斯う言つた。

「有難う」

宗房は素直に賴んだ。

「御主人樣が、お歸りと仰せられぬうち、急いで縫つて上げませう」

お雪は彼と連れ立つて、今來た方へ引返した。影繪のやうな二人の姿が、すべての物象を朧に見せる春の夜に、淡く夢のやうに縺れ動いた。

五

宗房が主人の供をして屋敷に歸り、暇を告げて更に自分の家に戻つた時には、最う夜は大分更けて居た。翌朝になつて、またいつもの通り屋敷に出勤したところが、家中の人のうちには、妙に擽つたいやうな微笑を浮べて、彼の顔を見るものもあつた。

「昨夜の花見は好かつたでせう」

などゝ、意味ありげに言ふものもあつた。彼には一向それが解せなかつたが、隔意の無い仲間の一人から聞かされて、初めて其の譯を知つた。

城内に花見の宴の催された昨夜、人々は花に酔ひ酒に酔うて、他愛も無く打興じて居る折に、いつの間に目顔で牒(しめ)し合せたものか、宗房と腰元のお雪とが、植込の影に人目を避けながら、互に寄り添うて、密やかに語らつて居たところを、誰かゞ闘らずも見つけて、それが噂に上つたといふことなのだ。

下らないことを、人は話頭に上せて興がるものだと彼は思つた。併しまた考へて

見ると、自分とお雪との間に、少しも疚しいことがなかつたにしても、生ぬるい風が肌を撫でゝ、何となく人の心を蕩かすやうな、花散る春の朧夜に、若い男と女とが、何か知らぬが話し合つて居るところを、始終の様子も知らずに、フト除所目に見たならば、殊に朦朧とした酔眼などで見たならば、或は妙に氣取れたかも知れないと思つた。

けれどもそれならばそれとして、また別な厭な心持がした。それは、昨夜のあの二人が、自分とお雪とであつたことの、確かめられてあるところから見ると、此方では何も氣づかずに居たが、先方では怪しと見て、抜足差足忍び寄つて、物蔭にても隠れて、二人の様子を窺つて居たに違ひない。それは城内の人か、それとも屋敷の人か知らないが、快い酒の機嫌で居たてあつたらうに、何といふ物好きな、そして何といふ卑劣なことをしたものだらうと思つたのだ。

斯う思ふと、まだ世故に長けぬ、若竹のやうな生一本の彼は、人と人との間柄と

いふものに對して、冷たい疑ひが狹まれた。人は面と面とを向き合せては、互に力になり爲にならうとするやうな口吻を洩し合ひながら、而も其實心の底では、自分だけを確かりと無難に大事に守つて、寧ろ他の身の上には、何か異つたことでも持ち上ればよいがといふやうな、不眞面目さを抱いて居るものらしく思へて來て、霜白い石の上に、素足で立つたやうな寒い感じを、人と人との交際といふものゝ上に覺えた。

六

或日主人に從つて、宗房はまた城に行つた。主人が奥に通つたあとで、彼は一人

城内の其處此處を歩いた。北の方は風を防ぐために、殊に樹木が多かつた。其の重なり合つた樹木を潜つて、石垣の岸に立つと、濠を隔てた直ぐ彼方に、松林の小丘があつて、城壁の或る部分に石の階段が設けてあり、それを下れば其の松の丘の繁みの中に行かれるやうになつて居た。赤褐色の幹をして緑葉を濃かに重ねた、其の山松の集團が、彼は豫てから好きであつただけに、おのづと其の方に足が向いた。

日影の洩れぬ其の松の中に、お雪の佇み居るのがチラリと目に止つた。彼は意外に思つた。胸は何とはなしに高鳴つた。痩形で髪が黑く、色の際立つて白い彼女が紅絹裏の袖口から出した片手を、松の幹にかけて、まるで濠の中から拔け出た水の精でもあるかのやうに、すらりとした姿で立つて居るのだ。先方でも氣がついた。宗房の方に顔を向けた彼女は、會釋ともつかぬ妙な素振をした。それは間の惡いところを見つけられたゝめの、繕ひのやうにも取れた。また、彼に會ふことを豫期して居て、早く此處へ來て呉れといふ風にも思へた。彼は石垣の石段を下り、草の繁

みの中の小逕を歩いて、お雪の立つて居る其の松の丘へ行つた。

彼女は、自分の側まで、宗房が辿つて來る間、默つて只顏だけを向けて居た。見ると其の瞳つた黑い目の瞼毛に、涙を一ぱいにためて、瞬きをしたなら、ポトポトと落ちさうにして居るのであつた。宗房の胸には、何といふこともない哀情が先づ湧いて來た。

「濟まないことをしました」

と彼女は言つた。

「――――」

宗房は返事に困つた。

「私は構ひませんが、あなたに申譯がありません」

とこれだけ言つたかと思ふと、彼女の頰には、今まで堪へて居た涙が流れ出した。宗房はまだ返事の仕樣が無かつたが、胡弓の音でも聽いた時のやうな、涙ぐましい

心持になつた。

「花見の宴の催された此間の夜、私が餘計なお世話をしましたのが因で、あなたと私とは、あられもない濡衣を着せられたのです。」

宗房が屋敷の人達に噂されたやうに、お雪も城內の男女の間に、噂されてゐたのであつたことが知れた。

『初めはほんの一時の、からかひかと思つて居りましたが、日數を經ても噂はしつこく弄ばれて、今では、日頃心易立てな仲間の婦人までが、眞に受けて居るのです」

「私もそれと同じ噂を屋敷でされて居ます。けれども何時かは判ることです。面白づくに、他の噂をした人達が、其の噂をしたことに耻ぢる時があるでせう」

「お屋敷の方にまで、そんな噂があるのですか。お氣の毒です。この根も無い噂を、どうにかして、默つたまゝで晴してやりたくて、此處で考へて居たのです」

勝氣なお雪は、思ひ詰めたやうに斯う言つて、丘の下に牛の眸のやうに靜かに深

く湛へて居る、濠の水面に眤と見入つた。宗房はハッと心に動悸がした。お雪の感情は昂つて居る。一歩前に身を躍らせば、彼女の身體は、深い水の中に呑まれて、あとに波紋を殘すばかりだ。宗房は殆んど無意識に、お雪を抱き込んだ。彼女はその手を解きほどかうとはせずに、されるまゝになつて居た。

「無暗に人の身の上に噂を立てゝ、其の噂を立てられた人が、どれだけの心に深い傷きを覺えるかをも察せぬやうな、無耻な卑劣な人間は、たゞ蔑んでやれば充分です」

宗房は妙に男々しい心持になつて、凛として斯う言つた。お雪は指の先で、頰の涙をこすりながら、素直に肯いた。其時の彼女には、宗房より年長の婦人とか、負け嫌ひの性質とかいふやうなものが、全く無くなつて、たゝ男の强みに心を投げかける、女性本來の柔らかさのみになつて居た。宗房は自分に有つて居ない或る優しみを、思ひがけずも此時初めて異性の内に見出した。そして今までについぞ覺えの

無い、哀れな或る愛を感じた。

お雪の胸の温みが宗房の腕にあつた。乳色した頂に、黑い襟足がくつきりとして居る。初夏に移らうとして、なほ行く春の惱ましげにある微風が、吹くともなしに草木を撫でた。

七

思ひもよらぬ濡衣を着せられたことに反抗する同じ心持と、おのづと互に庇ひ合ふやうな涙ぐましい不思議な感情とが、遂に二人を全く豫期せぬ戀に、始めて落してしまつた。

二人は自らのことに怖えるやうな、目を伏せるやうな、甘悲しい感情を包み合つて居たが、それが何時までも人に知れずには居なかつた。噂は更に燃え上つて、とう〳〵良忠の耳にまで入つた。これが同じ屋敷内に持上つたことならば、處置するにも事は易からうが、相手の女は城内の腰元、一方は自分が平素から目をかけて、身分こそ違ふが、弟のやうに思つて居る宗房であるだけに、主人の良忠は心配せずには居られなかつた。

城内にしても、屋敷にしても、不義といふことに就ては、矢釜しく掟されてあるのだ。それであるのに、二人の情事は、もう可なり人々の口の端に上つて居る樣子なのだ。良忠が、これを事も無げに穩便に消し去らうがためには、どのくらゐ心を碎いたか、充分想像することが出來た。けれども良忠は、宗房に向つては、詰り責めるといふやうなことはしなかつた。

「お前と、城内のお雪とかいふ腰元との間に、をかしな噂のあることを耳にした。

私はそれが事實であるか事實でないかを、今茲で確かめようといふではない。恐らくは事實であるまいと思つて居る。併しさういふ誤解を人から招くといふのは、お前にしても其の女にしても、何處かに隙があるからのことだ。李下に冠を正すなといふのは、つまり斯ういふことを言ふのであらう。今後は決してそんな噂を立てられぬやうに、必ず氣をつけて貰はなくてはならない。城内の方も、それ〴〵に心を配つて、取計つて貰いた。屋敷の者達にも、口さがないことを慎むやうに言つて置いた」

主人は斯うあつさりと諭したゞけで、容赦なく抉り審くといふやうなことはしなかつた。それだけに宗房は、却つて心苦しく、今更のことてはないが、主人の恩誼に感激するよりほかになかつた。そしていつぞや經書の上で敎つたこと――君子は山野に獵をしても、全然包圍するといふことはせずに、必ず網の一方だけはあけて逍路にしてある――といふことまでを思ひ出して、沁々と主人の德を思慕した

のであつた。

併しさうしたことも、今では皆過去の思ひ出となつてしまつた。有難い主人の魂は此世に亡くなり、たゞ白臘のやうな冷たい遺骸だけが、こゝ數日の中だけ邸内にあるばかりだ。親鳥の温かい翼の下を離れた雛のやうな、頼りない弱い心持に彼はなつて、今更のやうに、主人在つての自分であつたことを、切實に感じた。

葬儀が濟んで、一段落ついたならば、これを機會に屋敷を去つて、昔の西行法師のやうに、人々と離れ、鄉土に背いて、行方も知れぬ旅の空にても漂泊つて、此の遺る瀨ない心持を忘れよう――。彼は最う、感傷的な詩人肌の人になつて居ることを、はつきりと自身の内に見た。

八

主人に死別れたのを機會にして、是迄の生活から、周圍から、さつぱりと足を洗つてしまつて、さうして何の道、自分の心に適つた境遇を、新たに切開かうといふ考への募つたに就ては、他にも原因が潜んで居た。それは宗房の身に取つては、實に迷惑な事であると共に、恐らく一生を通じても、遂に明らかに解くことの憚られる、腹立たゝしく、悲しく、さうして恐ろしい謎であつた。彼は今でも、フトそれを胸に浮べる度に、背中から水でも浴せられるやうな、寒さを覺えずには居られないのだ。

昨年亡くなつた長兄は、性來病身であつたゝめに、自分一人だけが實家を出て、城下の町端れに、別に小さな一戸を構へて、寺小屋のやうなものを開いて、附近の兒童達を集めて、暮して居たのであつた。宗房は老父母の許に、次兄――――今では只一人の兄と一緒に住つて、時には屋敷に宿直をしたり、家に歸つて寢たりして居たのだ。

ところが兄は二年程前に、父や母にも碌々相談もせずに、突然に其の妻を離縁してしまつたのだ。言ふまでも無く、宗房などには、前以て一言の話もなかつたのだ。たゞ彼が或日いつもの通り、夕方屋敷から歸つて見ると、平素は殆んど家を明けたことのない嫂の姿が見えない。けれどもさまで氣にも止めずに居た。ところが何時までたつても嫂は歸つて來ない。

老いて腰の曲りかけた母が、勝手元で何かごと〳〵と、夕食のこしらへをして居る。宗房は何となく家の中が、何時もより寂れて居ることに、漸く氣が付いて變に思つた。食事が濟んでも、夜になつても、遂に嫂の姿は見えなかつた。やがて父母は、言葉少なに、奥の別室に立つてしまつた。兄も默りがちにして、奥間に物の挾つたやうな素振をして居る。妙だとは思ひながらも、宗房には一向に樣子が解せなかつた。

うづくまつて、火箸の先で灰を弄んで居た兄は、觸れたくないものに、觸れなければならないといふ風にチラと宗房の方を見ながら「止むを得ない事情があつて、妻を離縁した」といふことを、ほんの一言だけ洩した。

宗房は意外に思つた、そして兄を宥めて、成らうことなら、元通りに圓く納まるやうに、及ばぬながらも執りなしたいと思つた。またそれは望みの絶えたことゝしても、兄の心配を自分にも分けて貰ひたいと思つた。それで、途切れ〳〵ながら、いろ〳〵に言葉を進めて見たが、兄は其の話に就て、深入することを避けたいやうにして、多くを言はなかつた。宗房は其の意中を測りかねて、繼穂を失つて其儘默つてしまつたのであつた。それは彼がお雪とのことがあつてから、間も無くのことであつた。

ところが、其後幾日も經たないうちに、兄の許に後妻が來るといふ話になつた。其の樣子では、既に確定してしまつたらしい。宗房は今更追つゝかないことに、差し出がましいことを言はうなどゝは決して思はなかつたが、何故兄は、先妻を離縁

するに就ても、今度また新たに後妻を迎へるにしても、父母にすら碌々相談もせずに、無論自分などには前以て一言も話して呉れずに、妙に秘密の裡に事を運ぶのかそれだけが不審に思はれた。やがて第二の嫂が輿入して來た。先の嫂は至つて氣質が良かつた。今度の嫂は、氣質はどうか知らないが、先づ見たところ、前の嫂よりも、幾らか若いやうに、美しいやうにだけは見えたのであつた。

九

或る日宗房は、町端れの長兄の家に遊びに行つた。種々の雜談をして居るうちに長兄は消息子を入れるやうに言つた。

「どうだ、今度の嫂は」

「よく家の内をやつて居られるやうです」

「先の家内を出す時には、お前にも、前以て兄から何か話でもあつたのてあつたか」

「何のお話もありませんでした。たゞ嫂さんの居らなくなられましたあとで、離縁されたことを、一言聞かされたゞけです」

「實はそれに就ては、此の私にも何の相談も無かつたのだ。態々相談を受けなかつたのみか、今から思ふと、恰度先の嫂が、實家から來た者に、引取られて行かうとする時であつたのだ。其時私は何も知らずに、偶然訪ねて行つたのてあつた。すると兄は、私の足音を聞きつけて、急いで内から出て來て、私を玄關先に阻むやうにして、今、込み入つた話をして居る來客があるから、濟まないがまた出直して來て呉れるやうにといふことであつた。他人ではなし、私は別段氣にも止めずに歸つて來たのであつたが、今になつてそれが知れて見ると、なぜ私を其時其場に臨ませな

かつたのか、妙に思へてならない」

「そんなことがあつたのでしたか」

宗房は、次兄が先妻の離縁問題に就て、兩親にすら碌々相談もせず、自分にも一向話もしなかつたのみか、長兄にも亦秘密にして、たゞ一人て事を運んだのであつたことを知つた。

「私からいふと、直ぐの弟のことで、決して惡くは取りたくないが、それ以來私は、あれの心持が解らなくなつてしまつたのだ」

「私も兄さんの人柄は、能く知つて居たつもりでしたが——」

話は途切れた。長兄は暫く何か考へて居る樣子であつたが、またあとを續けた。

「お前、氣を惡くしてはいけない。私は毫しも信じて居ないのだから。信じて居なければこそ、話もするやうな譯なのだから——。」

「どんなお話ですか」

宗房は長兄の顏に目を注いだ。

「お前の耳には入れぬ方が、よいかとも思つたことであつたが、併し何ぞの心得にもならうかと思ふから話すのだ。實は兄は、先妻を離緣した理由として、お前と先妻との間に、何か道ならぬことでもあつたかのやうに、今度の家内に言つて聞かせたらしい。夫の言ふことを妻として信じるのは無理もないが、今度の家内はそれを眞に受けて、先妻を非常に蔑んで居る樣子だ。それには無論、先妻に對する後妻の『理由の無い嫉妬』といふやうなものも加はつてのことだらうが」

宗房は、實に意外なことを耳にして、毒藥でも服まされて、五臟六腑の痺れるやうな感じがした。眼の前が不意に暗くなつたやうな氣がした。

「何もかも言つてしまはう。兄は今度の家内に、まだ種々なことを言つて聞かせた樣子だ。お前と先妻との間を怪しいと見て取つて、どうかして現場を見屆けようと、お前が家に寢て、兄がお屋敷に宿直の夜などは、事に託して拔け出て來て、草履穿

きの忍び足て、こつそりと戸の外から、我家の内を覗いたことすらあるなどゝも言つて聞かせたさうだ。兄は無論今度の妻にだけ話したつもりだらうが、得て斯ういふことは知れがちなもので、今ては親戚の者が皆知つて居る。何も知らずに居るお前の顔を見ると氣の毒てならないし、それにまた今後の心得にもならうと思ふから、ついてながら言つて置くまてだ。直ぐに事を荒立てるやうなことをしてはならない。兩親も心配する。どうぞ是まて通り何氣無い體て居て呉れ。誰もそんなことを信じはしないから。兄の自分勝手から、新らしい妻が欲しくなつたばかりに、落度も無いお前達に罪を着せたのだと、皆が言つて居る」

十

宗房は默つて聽いて居るうちに、涙がポト〳〵と落ちて來た。悲しいやうな、口惜しいやうな、恐ろしいやうな、一種譬へやうの無い感動に胸が鳴つた。若し更に長兄に、それ以上に思ひ遣りの優しい言葉でも續けられたのであつたならば、獻(すゝりなき)欷(なき)ても足りなかつたであらうが、いゝ按配に長兄の言葉はそれだけで途切れた。彼は不覺の慟哭をせずに濟んで、助かつたやうな氣がした。

宗房の頭は憂鬱を以て滿された。鍋でもすぽりとかぶされたやうな氣がした。是まで一番世話にもなり、頼りにもして居た兄が、急に恐ろしくなつて來た。なぜ其のやうな苦肉の策を弄したのだらうと、情無くもあれば、腹立たしくもあつた。殊にそれが『骨肉同志』と『情事の葛藤』とが結びつけられてあるだけに、一層その不快さが深刻であつた。

同時に或る別な思はくが心頭を掠めた。それは、若しやすると、兄は何かの誤解から、自分と先の嫂との間に、本當に不義の行爲でもあつたやうに思ひ込んて居る

のではあるまいか、それで嫂の方は斷然とした處分をしてしまつたが、一方は血を分けた我が實の弟のことであるだけに、憎く思ひながらも、現はな處置もしかねて何氣ない樣子をして、堪へて居るのではあるまいか――といふ疑惑であつた。

若しも其のやうな厭な行きちがひが潜んで居るものとするならば、兄は今度の妻に對する自分の擧動に就ても、間かな隙がな常に警戒の目を注いて居るに違ひない。果して其のやうな消息が苟且にもあるものとするならば、自分は寧ろ何ういふ方法をとるにせよ、兎に角兄の家から遠ざかるに若くはないと思つた。併し『事を荒立てゝはいけない。今迄どほりに、さりげない體で居れ』と、長兄から呉々も諭されて見れば、それもしかねた。

それに恰度また、そんな紛騒の持ち上る少し以前に、自分にはお雪とのことがあつた。兄の耳にも入つて居るに違ひない。まだ子供だと思つて居るうちに、油斷がならないものだといふやうな心持が、毎日一つ家に起居して居る自分の妻との間に

まで思ひ及ぼして、それが何時とはなしに、疑惑の雲となつて、兄の頭に映るやうになつたのではあるまいか。萬一にも其のやうな關はりが、知らず識らずの間に働いたのであつたとすれば、兄を恨むよりも、先づ自分の不德を省みなければならないとも思つた。

兄と直接膝突き合して、ざつくばらんに語り合つて、言ひ開きをすべきことは言ひ開きをし、誤解は誤解として水に流して貰ひたいやうな焦燥を、思ひ出す度に彼は感ぜぬではなかつたが、併し事柄が事柄だけに、それにまた長兄の言ふやうに、たゞ兄の我儘勝手な、浮氣や利己心を滿足させたいばかりに、人のよい先妻や、何も知らぬ自分達に、難癖を止む無くつけたものとすれば、それを言ひ出すと兄を耻かしめることにもなると思つたりして、そぐはない心持を兄に寄せながらも、其儘今日まで過して來たのであつた。

昨年長兄に亡くなられて、行き馴れた町端れの茅葺の家――手習の子供達が集

つて賑であつた家に、間も無く見知らぬ人が住むやうになつたのを、通りすがりに垣根越しに眺めた時には、宗房は寂しかつた。それに今また、大切な主人を失つてしまつたのだ。

今度こそ自分の一身上に、革まる時が來たのだ。姑息に悲圖々々して居ては、一生取り返しのつかないやうな心持がする。さう思ふと、亡くなつた主人の魂までが耳元で囁くやうな氣がする。——たとへ私が存命して居ても、お前は一生此の狹い伊賀の國だけで老いべき者ではない。お前は燻銀(いぶしぎん)のやうな、磨けば磨くほど、底光りのする何物かを内に有つて居る。お前はそれを持ち腐れにしてはいけない。それには先づ、是までの環境から離れることだ。故山から離れることだ。老いたる父母と離れることも亦止むを得まい。さうしたならば、お前は屹度、お前の行く手に或る新生面を見出すであらう——。

十一

良忠の葬儀は濟んだ。邸内の混雜も、水の引いた後のやうに、おひ〳〵靜かになつて來た。けれども宗房の心だけは、落ちつく譯にいかなかつた。

「私が死んだならば、遺髮だけは高野山の報恩院に納めて呉れ。お前に特に頼んで置く」

これは良忠が臨終間際の、宗房への頼みの言葉であつた。

「主人の遺言を守つて、先づ兎に角高野山へ行つて來よう。自分の一身上に就てはそれからのことだ」

宗房は、是までしば〳〵京都へ行く時に通ひ馴れた笠置山下を、加茂にかゝて木津に出た。右を指せば十里ばかりで京都に行かれる。彼は其處から道を左にとつた。高野までは京都への三倍も里數がある。其の上初めての旅路で、行く先々土地に不案内であつたものだから、可なりに骨が折れた。殊に藍を流したやうな、水の清く深い紀の川を舟で渡つて、數丁の平野を行き盡して、高野の山口にさしかゝつてからは、登るにつれて、いよ〳〵困難であつた。

峽谷を見下すと、長さ數丁にも亘つて、而もそれが一枚の岩石のやうな巨巖が深く抉れて、其の間を川が流れて居る。或る處は瀨となつて居た。また或る處は青い淵となつて、水は澄明であるにも拘はらず、底は氣味の惡いほど暗色を呈して居る。此の山の特有らしい槇の巨木や、抱える程太い杉の老樹が、日光を厚く遮つて、初夏の季候であるのに、木の下は水を打つたやうな冷々として居た。

振返つて、北の方を見渡すと、先に自分が辿り來つた紀の川の流域が、遙か平ら

に展けて、其の彼方には、右に金剛山、左に葛城山が、僅かに座を隔てゝ、互に高低を爭ふやうな山勢を示して、悠々と聳えて、綠草に彩られた裾野を、おの〳〵なだらかに、廣々と捌いて居る。

一方には嶮しい峯が連なつて居る。一方には過つて、脚を踏みはづせば、身體は微塵に碎けさうな、目の眩むほど深い谿谷が、青葉の奥底に口を開いて居る。山質を構成する岩壁には、雜木や雜草が密々として抱きついて居る。たま〳〵、清水の迸つて居るところなどもあつた。

登るにつれて、山の深いことが、益々知れる。見上げるばかりの樹木が、いよいよ鬱蒼と繁り合つて、何處とも知れずに水の音が響いて來る。名も知れぬ鳥の啼聲などもする。豫て聞いて居た、佛法僧といふ鳥が、あれではあるまいか、などゝ彼は思つた。彼の懷中には、若くして世を去つた主人の、黑々とした遺髮が匂つて居る。自分の今歩きつゝある道は、伊賀の國を去る數十里の、木立の深い山中だ。

遠い〳〵九州の果から、風雨幾十日となく費して尋ねて來て、目のあたり生の父に邂逅しながら、父と名乗ることを拒まれるとも知らずに、母を籠に置いて、矢張り此の山道を、一人とぼ〳〵と登つたてあらうと思はれる、石童丸の幼くたど〳〵しい歩みなどまでが、現在の自分の感傷多い身に引比べて、他事ならず哀れな物語となつて、胸の中に蘇つて來た。

極樂橋といふのを渡つた。弘法大師が、いろは歌を作つたと傳へられて居る、四十八曲りの不動坂といふ、岩だらけの峻嶮な道も越した。其の途中には、昔、お山の禁を破つたものを投け捨てた處と傳へられる、千丈落しといふ物凄い斷崖もあつた。

結界四里四方。山に倚り谷に臨む僧堂百三十。どんなに重い罪科を犯したものでも、一度此の寺域に遁れ來れは、處罰から免れるといふ、現世に超越した、崇嚴な寺院の散在して居る場所に到り着いた。梵唄の聲は凉しく嵐氣に流れて、娑婆の塵

を全く絶つて居る。彼は、王侯の權力を以ても、尙且つ侵すことの出來ぬ、護法の府城に入り來つたやうな心持を、沁々と身に感じた。「閑林獨坐僧堂曉」といつた、此の山の宗祖空海の、深く圓らかな菩提心も思ひ仰がれた。

報恩院の内は、薄暗く空氣が靜まつて、自身の心音すら聞えるほどに、森閑として居た。内陣の奥に端嚴微妙の相をした佛體が、默然として而も何かを示現して居るやうに思はれた。ほの〳〵と瞬く燈明の灯影と、搖曳する香の煙との、幽かに縺れ合ふ中に、目を瞑り掌を合せて、亡くなつた主人の俤を、まざ〳〵と胸に浮べながら、只管に其の冥福を祈つて居る彼は、底無き大海原の奥にでも沈むやうな、雲に乘つて蒼空にでも浮ぶやうな、不思議なほど靜けさ境に、心思は惹きつけられて幽明の區別の取拂はれて、恰も鏡に映る影のやうな、有るともなく、また無いともない、言語の道斷えた法界で、懷かしい主人の靈と、親しく直下に交はるやうな感應に打たれて、瞼はおのづと濡れて來た。

十二

宗房は、氣の抜けたやうなすぼりとした心持で、伊賀に歸つて來た。或は人目には、物にでも憑かれて居るやうに見えたであらう。邸内に出入しても、一向に物が手につかず、幾日の間か空虛な頭を持ち續けて來た。

折から主家に後繼問題に就て論議が持ち上つた。それは跡に遺つたのは、まだ東西も知らぬ幼兒であるから、相當の年輩に達して居る者を、同族の間から養子に迎へようといふ説と、たとひ乳呑兒でも、先主の忘れ形見である以上は、それを後嗣として、未亡人が守立てることの正當であるといふ説とであつた。彼は無論後説に

左袒して、決して動かうとしなかつた。結果は宗房等の主張通りになつた。

ところが、意見を反對にした人々の中には、それが餘程快くなかつたためか、彼が後説を堅くとつて止まなかつたのを見て、彼と若く美しい未亡人との間に、人目を忍んで、主從の離を越したことでもして居るかのやうに、認ひる者があつた。また彼が人をさし置いて、故主の遺髪を携へて、態々遠く高野山などに登つたのも、良人を亡つて寂しさに居る、若い未亡人の歡心を買うて、其隙に取入らうとする野心から出たことだとまで、噂するものゝあることも耳にした。

自分が何んな惱みを抱いて居るか、此の心底を知りもせずに、徒らに己れ等の陋劣な考へを、無責任に延長して、さうしてそれを以て、他の上に揣摩臆測を弄び、痛くも無い腹を索られた當人が、どれほど迷惑を、それによつて蒙るかといふことを顧みないやうな者は、既に豚と同化した、救の無い人間なのだ――と、彼は非常に憤つた。と同時に、女難とでも言はうか、これまで兎角異性との間に物議を讓

し易い、自分に備はつて居る何者かに對して、呆れるやうな感じもした。

お雪とのことに就てもさうだ。全く何の豫想もなしに、あゝした關係に陷つたのも、また其の以前にあたつて根も葉もないことを噂に立てられたのも、或は先の嫂のことに就ても、自分は何も知らぬ間に、棘とするやうな恐ろしい濡衣を着せられて居たのだ。それにまた今度は、相手もあらうに、最も恩誼の厚い故主の未亡人との間にまで、忌はしい取沙汰をされるとは、何といふことだらう。何にしても最う此儘居る譯に行かない。未亡人の貞操を潔くする點からいつても、自分は再び邸内に出入すべきではないと考へた。

自分の一身上には、是までの境遇を一切かなぐり捨てゝ、新たに心の整理をすべき時機が來て居たのであつた。一日も早く其の道程に向つて、足を踏み入れべき筈であつたのに、つひ愚圖々々して居た。最う此上逡巡して居てはならない。自分には既に運命が來て居るのだ。其の運命に素直に從はなければならない、と彼は決心

した。

誰一人にも告げずに、今夜といふ今夜こそ、こつそりと故郷を立退いてしまはう——。

さて愈々さう決めて見ると、すべての物に急に執着を覺えて來た。それは今まで捨てゝ顧みなかつたものも、他手に渡つて見ると欲しくなるやうな心持に似て居た。言葉少く落ちついた白髮の父。何時も自分の好物を選んで食膳に上せて呉れる老母。互に憚り合つて今日まで來たあのお雪。百坪程ある生れながらの我が家の内外。樹木。飼犬。古机。其の他悉くに心が惹かれた。のみならず、是れまで餘り好い感じを持てずに居た人々までが、妙に懷かしいものゝやうに思へて來た。

赤坂町の宗房の家は、西側に在つた。其の筋向ふに城といふ姓の人で、彼と殆て親しい屋敷での同僚が住つて居た。一語も言はずに、全く沈默の儘で、伊賀を出奔してしまはうと、今の今まで思つて居た彼は、いよ〳〵立去る間際になつて、翌る

朝、東の空に、日の出を仰ぎ見る時の自分は、既に行人なのだ。他所の者なのだと思ふと、感情に傷ましいものが裏づけられて來た。態とらしいやうな氣のせぬでもなかつたが、行きがけに彼は紙片に句を書いて、其の親友の家の、垣根の中にほうり込んだ。

雲と隔つ友かや雁の生別れ

十三

秀明な鄕土の自然に育まれ、亡くなつた主人の風騷に刺戟されて、宛ら地下を潛る水のやうに、脈々として、内に流れつゝあつた、大きな詩人の天賦を有する宗房

の脚は、磁石に吸はれる鐵のやうに、おのづから京都に向つた。京都には豫て彼の知つて居る、國學者にして文人の、北村季吟が居たからだ。

彼は東山の端れの、白河口に近い百姓家の一隅に巣を見つけた。それは物置小屋同然の離舍に、三四畳の疊を敷いて貰つたものだ。彼は毎日其のあばら屋から、季吟の許に通つて、寫本の手傳などをして、糊口の助けを得ながら、傍ら文學の研究に沒頭した。

ところが京都の人となつて、一ト先づ落ちついて見ると、一方には、自分の思ひの儘に事を決行したのだといふ滿足がありながら、ともすると其の隙間から、或る遣る無い寂しさが、しんみりと襲ひ來るのであつた。

歸つて來ても、待つ人も無く、火の氣の無いやうな處に、ぽつねんとして居ると、死別してから、まだ一年とも立たない、主人在世當時のことが思ひ出される。

我が子に默つて出て行かれた、年老いた兩親の面影も目に浮ぶ。——不孝の責

は暫く目こぼにして居て貰ひたい。離れても、親を思ふことに變りの無い此心は、必ず通ふであらう。何時か再び故郷の土を踏んで、今の此の複雜した心持を、過ぎた昔の思ひ出として、告白する時もあることゝ思ふ。どうぞ心配はしないやうに——と言つても、父や母は、肯きもしなければ、首を振りもしないやうな樣、寂しい子に思はれる——。

先の嫂の事あつて以來、感情に一刷毛の雲のかゝつて居た兄すらも、懷かしい人となつた。苟旦にも思はしくないことは、皆さつぱりと水に流れてしまつて、彼が初めて小姓として、屋敷に上つた時、何吳れとなく介添して吳れた以來の、深切さのみが跡に殘つた。自分が不意に姿を隱したに就ては、驚きもしたであらう。世間體を取繕ふ心配までもしたであらう。濟まないことだ——と思つた。

此んな女染みた感情に囚はれてはいけない。伊賀を立つ時には何うであつた。自分の行手には、何か知らぬ新らしい世界が、爽かな生面が、大手をひろげて待つ

て居て吳れるやうな氣持がして、心を躍らして、郷土を捨てゝ來たのではなかつたか、と鞭つて見ても、彼の若い胸は靜けくならなかつた。

自分では、既に是までに此の京都の土地とは、可なりに馴染を重ねて居つたつもりで、彼は居たが、實はそれは、嘗て主人の使に立つて、旅人として傍觀した馴染に過ぎなかつたことに、今更氣がついた。

土地の氣心に馴まず、まだ親しい交友もない彼は、『獨』に處る寂しい樂しみを解しながら、而も其の寂しみが寂しくてならなかつた。此の寂しい彼の心の内へ、忍びやかに入つて來て、鳩の胸毛のやうな柔かさで、温たかに彼を抱きすくめたものがある。それはお雪の影像であつた。

我ながら、何時の日再び歸らうとも知れずに、故郷を出る時の彼は、お雪の幻影を胸に浮べずには居られなかつた。けれども二人の事に就ては、亡くなつた主人に、どのやうな心配をかけたか。彼は其の厚意に感激して、主人の顏を潰すやうな、心

の離を二度と越すまいと、自身に固く誓つて、二年の間過して來たのだ。

それに今更愁ひ未練らしいことなどをしては、主人の靈に對して濟まない。只此儘別れてしまはう。默つて永久に別れてしまはう。お雪にも其の心持は、よく解るだらう。戀は必らずしも、添ひ遂げるのを美しいとしない——。斯う思ひながら其夜京都に向けた脚を、暫く町端れの丘に止めて、薄すりと星明りのする空の下に、お雪の居る城の森を眺めながら、果敢ない戀の跡を弔つて來たのであつた。

互に相會ふことを憚つて居たとは言へ、知らせれば知らせる方法もあらうに、糸から切れた凧のやうに、フラリと姿を消してしまつた自分の仕打を、お雪は何と思つて居るだらう——。

餘所の土地に身を置いて、他人の仲に入つて見ると、父母よりも、兄弟よりも、親友よりも、お雪其者が止み難いほどに思はれて來た。無根の浮名を立てられた者同志が、意地と庇ひ合ふ心持との絡ひ交つた、不思議な感情の中に、夢のやうに溶け込んで草木の若葉の微風に顫へる行く春の頃、ときめく胸を抑へ合つた、二年前の『現』ともないことが、繪卷の斷片のやうに、彼の胸に深く歸つて來た。

忘れよう忘れよう。何もかも忘れることだ。斯う思つて彼は、貧しい財布の底を叩いて、酒も飲んだ。賣女も抱いた。けれどもそれは無駄であつた。一時であつた。酒の香から醒め、諛の笑から醒めて、心身共に隙だらけになつた時、惱ましげなお雪の輪廓が一層鮮かになつて、其の温かい吐息の、頰に觸れる思ひがした。

一つ處に斯うしてぢつとして居るから、兎角いろ〳〵の事を思ひ出すのだ。いつそ旅に出よう。行く先々目先の變る旅の空を、さまよひ歩かう。さうして忘れよう。何もかも忘れよう。

彼は先づ大阪に出た。六甲の山彙の盡きる處、前面の港灣に、船舶の帆檣を林立させた、見はるかすやうな海津の光景も、山間に生ひ立つた彼には、珍らしかつた。幾十馬力を以て運搬したものか、何ういふ方法を以て疊み上げたものか、殆んど想像もつかないやうな、巨大な花崗質の切石を以て築いた、大阪城の天守跡に登つて、鳳翼を擴げたやうな、豐太閤の雄圖も追想した。一生を妖艶其者で終始した淀君の墓も見た。一千有餘年前に、固有の神道と、新來の佛教との間に、激しい軋轢を生じた時、關係の中心をなした、日本最初の伽藍と稱する、四天王寺の大がゝりな構造も見た。

一度言ひ出したら肯かぬ清盛が、後で止せばよかつたと悔とも知らずに、都を京都から遷したといふ、福原の內裏跡のあるあたりから、明石海峽を左方に見て、姫路に出た。秀吉の大きな野心の一片とも見るべき、白鷺城の五層の天主閣は、綠の樹間に白壁をすつきりと見せて居た。日光を海波に映した播磨灘は、遠くに水平の一

線を引いて、砂濱には鹽を燒く煙がする〳〵と上つたり、網などの干してある漁村などが、處々に點在して居た。

行く先は何處でもよい。たゞ無性に歩きさへすれば足るのだといふ彼の旅心は、行けば行くほど、それからそれへと募つて來て、とう〳〵中國筋を廣島に出た。嚴島は佐伯郡の陸岸に沿うて横つて居た。殿堂は樹木の鬱蒼と繁つた丘陵を背にして、水中に基礎を建てゝ、廊の端を更に七八間も海中に突出させてあつた。更に左右には、長さ百四十八間あるといふ、曲折した趣に富んだ廻廊が設けてあつて、一間毎に鐵製の燈籠が釣してある。潮が滿ち來ると、其の無數の燈籠がチラ〳〵と夜の波に映つて、現世離れのした美觀を呈するといふことであつた。鳥居は七十間も手前の砂上に立つて居るのであるが、彼の行つた時には、恰度滿潮であつたので、船の儘で其の下を潛ることが出來た。

旅情は更に旅情を誘つた。彼は其の山水の緣に隨つて、西へ西へと行つた。京都

を出てから、最う可なりの日數になる。足には豆が出來ては潰れ、出來ては潰れした。行き暮れて農家に泊めて貰つたこともある。荒廢した田舍の貧寺に、一夜を明したこともある。山中で雨に降られて、路傍の堂宇の狐格子の前に蹲つたこともある。

周防灘と玄海灘との、一路相通ずる、幅が狹く水の深い、瑠璃色した關門海峽を渡つて、遂に九州の一部に足を蹈み入れた。小倉から更に西して遠賀川を渡つて、赤間ヶ關を越えて、香椎の宮に參詣した。元寇の國難で有名な、松原續きの海岸を博多に來た。最う既に肥前に隣して居た。

佐用姫が山に登つて、小手を翳して、船出した背の君を、遙かの沖に見送りながら、影の見えなくなるまで領巾を振つて、別れを惜んで止まなかつたといふ、松浦灣も最う遠くはなかつた。彼は昔からの要路を左方にとつて、太宰府に行つた。既に廢墟となつて、纔かに當時の礎石の斷片らしいものなどが、青い苔に蒸され

て散つてゐた。背後に丘陵を控へ、前面に平野を麾いて、地の利に據つた八百年前の此の都府樓の跡は、宛ら霜の晨のやうに、滿目極めて荒涼として、人をして物を思はせる光景の裡にあつた。

何百里歩いたらう。よくも恁んなに來たものだと、彼はつくづく思つた。殊に本鳥を來盡して、海さへ渡つて居るだけに、なほさら天涯に孤客となつたやうな、遠い感じがした。

行く先々、それぞれに異る國訛を耳にするにつけても、脚に任せて旅から旅へと漂泊を續ける、自分の寂しい影が顧みられた。斯うして若い詩人の彼は、一年近くの久し振りで、京都に戻つて來た。

十五

元の隠居に入らうとして、母屋の人に暫く振りの挨拶をした。手拭を頭に冠つて軒先で柴を束ねてゐた主婦は、彼を側近くへ手招ぎするやうにして言つた。

「お留守のあとへ、女の方がお見えになりました。」

彼は不審に思つた。

「名は何といひました。」

「それは伺ひませんでした。」

「何と言つて歸りました。」

「お歸りにならずに居ります。」

主婦は、彼が不在にしてあつた、離屋の方を指しながら、

「年の頃二十七八のお方のやうです。あなたが旅にお立ちになつて、お留守のことを申しましたのでしたが、その御婦人が仰しやるには、私は伊賀から來た親戚の者で、會へば分ることだから、迷惑かも知れないが、お歸りになるまで跡へ泊めて置

いて貰ひたい煮炊のことなどは、自分で辨じて、決して手數はかけないと申されるのです。お見受けしましたところ、別に不審なお方とも思はれませんでしたので、それに今にも貴方がお歸りになるかも知れないと思ひまして、あれへお通し申して置きました。」

「何時頃來たのですか。」

「最う彼是一月ほどにもなりませう、大層靜かなお方で、おいでになるかどうか分らないほどです。此節では近所の樣子にお馴れになつて、銀閣寺を見て來たとか、裏山を越えて、白川村の端れの方まで行つて、比叡の方から流れて來るらしい、綺麗な川を見て來たとか、途で大原女に會つたなどゝお話しなさることもあります。」

彼は藁の積んである柿木の下を通つて、茶畑の彼方の自分の陋居に行つて、戸を開けて内を見た。留守を預る妻のやうに、落ちつき拂つてお雪が居た。彼は季節でもない時に、返り咲きの花でも見つけた時のやうな、意外な感じをしながら、破れ

た草鞋を足につけたまゝ、上り框のところへ突立つた。

お雪は彼の顔を見上げながら

「大層黒くおなりなさいました。見ちがへるほどでございます。」

と、持前の寂しい微笑を浮べた。

「黒くなりました。」

宗房も同じ居やうなことを言つた。

「お留守にお邪魔をして居りました。」

お雪は姉振つた樣子をして居る。

「私の此處に居ることがよく分りましたな」

宗房は困つた者に尋ね當てられたやうな淡い迷惑と、最と切めて戀しい者に、柔肌の胸を披かれたやうな嬉しさとを同時に感じた。

「あなたが不意に姿をお隱しになつたことは、其の後間も無く人傳てに聞きました

そして京都へお出になつたにちがひないと、ちやんと心の内に思ひ込んで居りました。それは當地に北村樣がお住ひになつて居られ、前々から御關係のあることを存じて居たからです。それてこちらへ參ると、直ぐに北村樣をお訪ねして、御樣子を伺ひました。案の狀知れました。」

お雪は態と澄したやうに斯う言つた。宗房は笑はされた。

「突然見えたに就ては、何か仔細でもあるんですか。」

「仔細といふほどでもありませんが、私もつい先月の初めに、お城からお暇を戴きました。それについては、いろ〳〵な事情があります。兎角獨り身の女には、誘惑がつきまとひます。殊に婚期でも過しますと、尙更恥かしい思ひもさせられがちです。そんなこんなて今度遠くへ旅立たうと思ひつきましたの。それには、叶ふことならば、最う一度お目にかゝつて、すつかり心置きなくして、お別れ申したいといふ氣になりまして、御迷惑かも知れぬと思ひながら、つひお訪ねしました。」

怨みがましいことを言はうの、未練らしく附纏はうのといふことを、お雪が强ひて抑へて居るらしく思はれるだけに、宗房は却つて、眞綿で首をしめられるやうな柔かい痛さを覺えた。

「あなたに默つて伊賀を立去る時には、心苦しく思はぬではなかつたのですが、あの塲合私の心持では、さうするよりほかになかつたのです。さうすることが却つていゝことだと思つたのです。あなたにばかりではない。兩親にも、兄にも、知人にも誰にも、跡に一言も殘さずに遁げ出したのでした。」

「おぼろげながら、すべて貴方のお心持は、私の胸に解つて居るつもりです。惡くなどは決して思つて居りません。」

「女の一人旅で、遠くの何處へ行かうといふのですか。」

「阿波の德島でございます。伊賀は亡くなつた兩親以來の馴染の土地ですが、お城を退いて見ますと、これぞといふほどの由緒の家もありません。元々父母の本國の

阿波にまゐれば、二三の親戚もあります。其處へ行つて身を落ちつけようと思ふのです。」

「德島といへば、大阪から船で行く、なか〳〵に長い海の路、淡路島の彼方になつて居て、鳴門の海峽を控へたところ。船に馴れない人などには、なか〳〵容易の旅ではない。」

此靈別れてしまつたならば、再び相會ふ機會もあるまい、と思つたならば、定めし言ひたいことも胸に積つて居るだらう、心細い氣もするだらうに、只僅かに問はれゝば答へるといふ風にして、愚痴も言はずに、昔の戀を包んだまゝ、海を隔てた馴れぬ國へ、遠く一人で旅立たうとする、寂しい諦めの女を思ふと、宗房の心は惱ましいものになつて來た。

お雪には、彼の心が直ぐに通じた。

「好んで行きたくはないのですけれど。」

斯う言つて目を俯せた。睫毛には露がついて居る。

十六

稍うねりをもつた漆のやうな黒い髪。細面ながらに、顴骨から顎にかけて、象牙の篦でゞももつて、すつと削り取つたやうな、脹かな頬、黒く寢て居る眉毛。拳をひらくと凹みの出來る白い手。衣服に包まれた肌身。月の野に咲く白い花を見るやうな心情——お雪はその總てを宗房の前に投げかけて居る。

心配をかけた主人の恩誼に感激して、その顔を潰すやうなことはしまいと、互に愼み合つて、本意無くも餘所々々しくして通して來た、二人の間に包んだまゝにしてあつた、過ぐる日の戀心は、埋火をかき立てたやうに、ほんのりと中から赤らんで來た。

「德島まで行かずとも、何とか方法もあらうと思ふ。」

『お顏を見、お聲を聽いて居りますと、思ひ立つたことも消えがてな、弱い女になつてしまひます。」

「伊賀を走つたあの晩、笠置の方へ道をとらうとして、町を出はづれてしまつた私は、暫く丘に立ちつくして。星の瞬く靑い夜空の下に、こんもりとしたお城の森を遙かに眺めながら、『雪』といふ名も、永久に捨てゝ來たつもりであつた。」

「私は捨てられたとは思ひませんでした。」

「さうだ。捨てたのではなかつたことに、後て氣がついた。」

「たま〳〵お城でお目にかゝることがありましても、互に避けるやうにして、氣振りにすら出しませんでも、言ひ知れぬ心の行き通ひが、貴方のお胸の裡を、直かに

感じさせて呉れるのでした。」

「あのやうな行きがゝりになつたことに、毫しの無理もないことにしたところで、どうせ添ひとげられる戀ではない。互に目を俯せ合うて是迄來たものを、故郷を去るからといつて、今更　ひなことをして、結局二人の爲にならぬやうではいけないと思つて、努めて心を冷たくして、其儘行方を晦ましたのであつた。」

「あなたがお屋敷を御出奔なされたことを、人傳てに耳にしました時には、廣々とした野原に、一人行き暮れたやうな氣がしましたが、それでも捨てられたとは決して思ひませんでした。何處に居られようとも、心と心とでお語り申して居るやうな心持で居りました。」

「主人に亡くなられた悲しみや、心に表裏のある世の人に對しての不快や、血で血を洗ふやうな情無い事柄やが絡ひ交つて、執念く附きまとふ心の行き詰りと、それに何かしらぬが、自分に新らしい生涯を開く時機の到來したやうな考へとから、窒

息から遁れるやうな心持で飛び出して來たのであつた。ところが離れて見て初めて住馴れぬ土地の肌から發散する冷かさを感じるにつけ、『雪』といふ名の、忘れ得ないものであつたことに氣が附いた。さうして自分といふものゝ、獨の寂しさを沁々と感じた。京都へ來てから自分は未だ何もして居ない。こんな筈でなかつたと思ひながら、何もし得なかつた。只其の遣る瀬無さを忘れようがために、今日まで空しく日を送つて來た。」

「遠くお別れしましてから、私の心に在りました貴方の面影が、以前よりも濃くなつて來ましたのと、同じお心持なのでございませう。」

「或る時は酒に正體もなく醉つても見た。卑しい女の笑も求めた。けれどもそれは結局無駄であつた。一時のことであつた。酒の醉から醒め、女の笑から醒めた時、遣り場の無い寂しさは、以前に倍加して、容赦も無く迫り來るのであつた。止み難い寂しさは、とう〳〵私をして旅に出した。今度の旅がそれであつた。行方も定め

ずに、脚の向くまゝに任せて、日毎に目先の變る山川草木に心を移しながら、行き行つて九州の方へまで渡つて、一年近くも、旅の空に漂泊を續けたのも、思物ふ隙を心に與へまいがためであつた。」

「私は幸福な女です。最う此の上は、貴方の面目を保ちますためには、遠く離れて住みますことも、幾年お目にかゝれぬことも意としません。元々、たゞ今一度たけお會ひ申して、お名殘を惜んだ後、遙々德島へ旅立たうと思つたくらゐなのですから。たゞ切めて、貴方の日蔭に生へる名も無い小草として、いつ〳〵までも過させて頂きたいと思ひます。」

直ぐ東に山を背負つた宗房の陋居は、朝日の射すのも遲いので、冬などは非常に寒かつた。正午近くまで庭先に霜の白いやうなこともあつた。前方の低地には、黑谷の眞如堂あたりから、吉田神社邊が、鬱蒼とした森林に圍まれて、人家は離れ〴〵に散在して居るのであつた。

お雪は其儘宗房の陋屋に居た。米鹽の資を得るためには、僅かばかり携へて來た衣類を金に換へもした。なりふり構はずに働いて內助もした。さうして何時の間にか五年あまり過した。

十七

宗房は、人として追々落附きが出て來たと同時に、研のかゝるにつれて、ますます地鐵に精鋭を現はす名刀のやうに、索り求めて止まぬ其の藝術に對する視野は、だん〳〵と明るく目の前に展けて來た。同時に京都の土地が狹くなつて來た。京都の俳壇なるものが鼻について來た。

飯尾宗祇、心敎法師、山崎宗鑑、中川守武、深草元政、北村季吟、安原貞室、其の他の俳豪が、次々に四方に現はれて、連歌から俳諧體の連歌に、また俳諧體の連歌から新らしい俳諧に移らうとする傾きにはなつて居たが、而も未だ其の過渡期にあつて、互に奇を吟じ、妙を吐かうと腐心する弊に陷り、其の結果、知らず識らずのうちに、おのづと卑俗低劣な言葉を用ひて、遂には滑稽洒落な惡趣味に墮したり内容の空虛な文字を徒らに麗はしく羅列して、其の惡達者な技巧に得意がつたり、雅宴と稱する權門の俗惡な催しに罷り出て、幇間に等しい行動をして、一場の酒興を助けたり、祿に文字も知らぬやうな人間までが、狒猴にして冠するやうな人眞似をして、埃のついた造花のやうな文句を弄して、一かどの俳人氣取りで、妙に風流がつたり、總じて俳諧を消閑の媒に止めて怪まない遊戯的傾向が、心生活を端的に表現する至上の藝術として、俳諧を取扱はうと開眼しつゝある彼には、何うしても承知が出來なくなつて來た。

斯のやうな沈濁した空氣の中から、早く足を洗つてしまはないと、自分が只管糊進しつゝある詩の扉にまで錆が生じて、開かうとしても開くことの出來ないものになつてしまう。愚圖々々しては居られない。それには江戸に出ることだ――と彼は思つた。

家康公が、武州豐島の郡江戸へ御打入あつてから、町は繁昌して來た。併し地形が廣くない。これによつて、豐島の洲崎に町をたてようと仰せあつて、慶長年間に日本六十餘州の人夫を寄せ集め、神田山を引崩し、南方の海を三十餘町も埋めさせて陸地となし、其の上に町家を建てられた。ために俄かに市街が廣大になつて、南は品川、西は田安の原、北は神田の原、東は淺草まで屋並が續き、家居百萬間と稱された震旦の都も、なか〳〵これには及ぶまい――といふやうな記錄などを見るにつけて、江戸は土地の若いだけに、すべてが整つて居ない。その整つてゐないところに、新鮮な活々したものが溢れて居るに違ひない。今こそまた文化の中心は京阪

の間に餘喘を保ちつゝあるが、政治の中心が既に江戸に移つたやうに、將來の文化の中心もまた、江戸に移らねばならぬ機運にあることは明らかである。

自分の藝術を健かに育てゝ行くための、自分に適つた住家は、江戸を措いて他に求められない。自分の内に瑞々しく擡頭しつゝある、潑溂とした詩想を、思ひの儘に伸々と創成せしめ得る天地は、月が草から出て草に入るといふ武藏野の廣袤だ。と宗房は早くも眼を着けた。

物體をそれ宛らに映す、拭き拔いた鏡のやうに、行住坐臥、常に宗房の心思を察知して餘さなかつたお雪には、彼の衷に動きつゝある心持が直ぐに讀めた。

「貴方は江戸へお出になりたいのでせう。貴方が、貴方の内にお有ちになつて居られる大切なものを、憾みないまでに磨かれますには、江戸の地をおいて他に無いと此の私やうな者にも思はれます。」

「總てに調子の未だ整ひ切らない江戸の草土は、私の前に鮮かな世界を、開いて居て呉れるやうに思はれるのだ。』

「早くおいでなさい。」

「併し樣子には不案内で、寄る邊も無い刄對面の土地へ、着のみ着のまゝの貧しい二人が、連れ立つで出かけることになつたならば、いろ〳〵の困難が伴ふことゝ思はれる。」

「私には構ひません。斯うして永らく居ります間も、常に氣をつけて居りましたことは、貴方の内に滿へられてある、大切なお心の水面を、自分から働きかけて、亂すやうなことはしまいといふ、それだけでした。默つて置去りにさせられることは厭ですけれど、お話をよく伺つて、納得の上ならば、貴方の足手纏ひになるやうなことは、決してしません。」

お雪は微笑しながら快く言つた。それにつけて、宗房に氣がゝりなことは、お雪が姙娠して居ることであつた。併しお雪は屈托して居ない。

「私の胸の中に貴方が在りますやうに、貴方のお胸の中に、私が常にありますならば、離れて住むことなどは意としません。私は此の京都に居殘りまして、何うともして、身すぎをして行きます。」

二人の間に、斯のやうな話の交はされて居る折に、伊賀から突然書面が屆いた。それは鄕里の兄が、人をして彼の居所を尋ねさせて、父の死んだことを知らせて寄越したのであつた。宗房は嚴かな寒さを身に感じた。

無斷で家を出てしまつて以來、音信不通にして、自分の仕打や心持を、年老いた人の頭にも、よく合點の行くやうに、解きほどく機會を捕へもせずに、氣の知れぬ不孝の子と思ひ込ませたまゝ、遂に臨終の死水すら取らずに、永久に逝かせてしまつたことに、取返しのつかぬ悔恨を覺えた。そして、せめては急いで歸つて、死顏になりとお目にかゝつて、心の中で篤とお詫びをしようと思つた。

同時に一方に於ては、また伊賀の土を踏みたい心持にはなれなかつた。それはさ

つぱりと忘れて居た兄に對する心苦しい反感を、目のあたり會うたために、新たにするやうな惧を避けたいのと、自分の所志を未だ成し遂げもせずに、今頃のこゝと出向いて行つて、故鄕の人々や、故鄕の風物に接することが、功名の心に燃えつゝある彼には、いかにも本意でなかつたからだ。

「私も御一緒にまゐつて、人目に觸れませぬやうに、せめては、餘所ながらなりと御柩をお見送りいたしたうございます。」

お雪は憂はしげに言つた。

「有難う。父も其の志を喜んで呉れるに違ひない。」

十八

二人は連れ立つて京都を立つた。けれども郷里の人々の思はくを考へて、伊賀へは離れ〴〵に入つた。そこには、森に包まれた城も、服部川の水の色も、昔の儘であつた。數里彼方の東々北に青く煙つて見える高い鈴鹿の山脈も、左方に裾を開いて、右方の他山と相對する低部を、一路伊勢の方に通ずるたゞすまひまでが、以前と少しも變りが無かつた。宗房には、七年以前の或る夜、誰にも告げずにこつそりと家を拔け出した時のことが、まざ〳〵と浮んで來た。

いよ〳〵の間際に、妙に心が感傷的になつて、別れの句を書きつけた紙片を、親友の家の門内に投げ込んたのであつたことまでが思ひ出された。そして、現在の自分の心持から見て、其のいかにも芝居染みて居た行爲てあつたことが、耻かしくもなつて來た。

冷たく土に歸つて行く父の葬儀は濟んだ。配偶を亡くして、跡に一人殘つた、老いたる母の影は一しほ寂しく見えた。そして離れて居て父を失つたのと同じ悔恨を

再び母の場合に見るのではあるまいかといふやうな、疑惧の念さへ起した。けれどもまた、思ひ立つた廣々とした江戸に出て、自分の一念を貫かうといふ、勃々とした功名心を捨てる譯に行かなかつた。そして、現在斯うして達者で居る母だ。父は早死し過ぎたのだ、母の壽命は未だ長い、といふやうな心持が、それを手傳つた。宗房は母に向つて、自分の考へて居る是から先のことを告げた。案外にも母は、彼の氣持を知つて居て呉れた。

「私のやうな年を老つた女などには、よくは解らないけれど、並々の人とちがつて偉い考を持つて居るお前なさうだから、出世のためとあれば、無理に女々しく引止めるやうなことはしない。だが此の通り年もとり、それにお父様にも亡くなられて寂しい身になつたのだから、兄が側に居るとは言へ、其の邊のところは察して、どうぞ文通は絶やさず、また時々は歸省もして下さい。」

と言つて、人と異つた頭に生れついて居る宗房に、一緒に暮すことを望んだとこ

ろて、到底無駄な相談であると、母は早くも諦めて居る樣子であつた。

兄も有難い人になつて居て呉れた。永年離れて居たゝめに、知らず識らずの裡に互に骨肉の情が濃かになつて居たせいもあらう。年をとつたせいもあらう。顔と顔とを合せて居ると、自づと心が和むほど、懐かしい人になつてゐた。

「どうぞ秀れた人になつて貰ひたい。お母さんは私が引受けて居る。心配には及ばない。お母さんの言はれる通り、音信を絶やさず、また時々歸省もして貰へれば、それてお母さんは喜んで居られる。」

お雪とのことも兄は薄々知つて居た。

「京都ては、適はしいつれあひと一緒かのやうに、風の便りに聞いたので、蔭ながら喜んで居た。併し今度、勝手の知れない江戸へ出ることになつたなら、最初のうちは、何かにつけて、一人身の方が都合がよからうと思はれるが、若し其の邊の心懸りなことでもあるならば、どのやうな相談にも預かりたい。母から言へば娘も同

樣な人、私等から言へば妹に當る人なのだから、決して他人とは思ひはしない。互に力になつて、及ぶたけのことはしたいものたが――。」

兄の言葉には、深切の情が滋々として溢れて居た。曩には只一人の長兄を亡くし今また父を亡くして、おひ〳〵身内の少くなつた寂しさから、せめては跡に殘つたものが、心かゝ睦み合つて行かうとする氣持らしゐか流露して居た。

郷里に歸つて來るまては、兄に會つた時の心持を、自分ながら懸念しつゝあつたのだが、絶えて相見なかつた、七年といふ『時』の力は、すべての蟠つた感情を一掃し浄化して、元來の無垢な兄弟の情愛の昔に立歸らせられてあつたことを、宗房は嬉しくてならなかつた。

彼は素直な弟となり切つて、總てを兄に打明けた。同棲して居た女といふのは、嘗て城内に腰元を勤めて居た時分に、不思議な成行きから戀に落ちたお雪といふ女であること。心配をかけた故の主人に對しても、今更　ひなことはすべきでないと

思つて、伊賀を出る時にも、無斷の儘で立去つたのであるが、京都に二年ばかり過して居るうちに、お雪が亡くなつた親の郷里の德島へ立つと言つて、別れの言葉をいひに來たのであつたが、つい其儘同棲するやうになつたのであつたこと。お雪は現に姙娠して居ること。自分の爲さうとすることを、能く知つて居て呉れるお雪の心持。其の他一切のことを話して、表向き妻と呼ぶことの、生涯あらうとも思へぬ幸福に薄い、日蔭の植物のやうな彼女の一身上に就て、折入つて兄に頼んだ。兄は快く承知して呉れた。

斯うしてお雪は、總てを呑み込んだ兄の肝煎の下に、伊賀に止まることになつた。

十九

松や欅や椿や、其他種々の針葉樹や濶葉樹が、日光を透さぬほどに、蓊鬱と繁り合つた丘陵の裾を、可なりに幅員のある川が、北から緩やかに流れて來て、堰に阻まれて、とろりと沼のやうに湛へ、再び落ちて流れて、行く水の末は更に左折して居る。

土橋の上には、太陽の光線を一ぱいに浴びながら、暢氣さうに釣糸を垂れて居る人などが見える。兩岸の泥がゝつた水淺い邊には、眞菰や蘆などが、青々と丈高く伸びて、斯種の植物に特有な、青臭い甘つたるい匂を放つて居る。葦切鳥の聲などもする。

其の流域から西の方には、田圃が一面に遠く展けて、淺綠の若い柔らかな稻の葉が、初夏の風に吹かれて、毛氈に波を打たしたやうに、凉しげに靡いて居る。更に彼方の、遙かに目路を劃つた處々の高臺は、松の森などに蔽はれて、眞晝の靄に淡く煙つて居る——。これは江戸小石川の、關口附近から見た、四邊の景色であつた。

恰度關口は、水道の工事中であつた。其の工事を監督する小吏の一人となつて、一團の人々の中に立混つて居たのは宗房であつた。前人未到の新生面を、俳諧の上に切開かうとして止まぬ、元來詩人の彼ではあるが、東漸した政治の中心となつて而も未だ完備の域に達して居ない大江戸に出て來た彼は、一方に於て獨創の天地を俳道の上に見出すことに潛心すると共に、一方に於ては機を見て幕府に近づき、仕官して大いに飛躍を試みようといふ、世間的の功名心をも、若い彼の胸に併せ抱かせたのであつた。併し直ぐに思ひ通りには行かないので、差當り先づ斯うしたことに職を求めて、當座を凌ぐことにしたのであつた。

半ヶ月過ぎ、一ヶ月過ぎたが、工事はなか〳〵の大仕掛で、まだちよつとには完成しさうでもなかつた。宗房は、關口から見る早稲田の景色を、粟津ヶ原に見立てたりしながら、毎日作業の場所に通つてゐた。日數の經るに從つて、おひ〳〵塲馴れがすべきであつたのに、事實はそれと反對に、勤める日數の多くなつて行けば行

くほど、其の集團の空氣の中から、知らず識らずのうちに、離れ行きつゝあるのを我ながら何うすることも出來なかつた。それは自分のたづさはつて居る、仕事其者から離れるといふよりも、等しく仕事に圍繞しつゝある、群集の間から離れて行くのであつた。

此の土木工事に關係して居る者の中には、幕府の侍も居た。臨時に任命された小役人も居た。作業の棟梁も居た。そして其の下働きに木工、土工、石工といふやうな人足共が、うよ〳〵と働いて居た。是等の分子から成立つて居る一團を、たゞ表面から見ると、其處に一種の秩序が保たれて、兎に角整然として、事を運びつゝあるやうに思へるが、一ト皮剝いた內幕に立至つて見ると、まるで其邊に壘々として置かれてある、石材、木材などの亂雜さと選ぶところがなかつた。

互に上下の別を辨へ、仕事の性質を呑み込み、厚意を交はし合つて、御用大事と仕事に精を出して居るやうに見えても、其の實は、他の落度でも見つければ、其の

落度を奇貨として、自分の野心を伸す餌に供さうといふやうに、極めて我勝ちで、油斷も隙もあつたものでなく、人夫を監督する其事よりも、用材の良否を吟味する其事よりも、仕事を捗らうとする努力其者よりも、寧ろ暗中に行はれつゝある、軍鷄の蹴合ひのやうなことに全力を盡して、きよと〳〵と身邊に注意し合つて居ることが、だん〳〵に見えて來た。

人足共の樣子を見ると、自分の監督される役人の前などへ出ては、殆んど人間性を帶びてゐぬ動物のやうに、無性矢鱈に首をへな〳〵下げたり、聞いて居る方で却つて氣耻かしくなるやうな、見え透いた世辭を述べたりしながら、一度蔭へ廻ると掌を覆さぬうちに、目をむいて赤い舌を出したり、聞くに堪へぬ惡口を囁くゞらゐは、何でもないことであつた。

顏に薄痘痕のある宗房も、何時の間にか『あばたの朴念』といふ綽名を付けられて居たのであつた。併し、他に綽名などをつけて、窃かに興がる其の者共を見渡すと、中には無智其者のやうな、だらしの無い顏附をして居るものもあれば、眇の者も居れば、跛の者も居た。頭顱ばかり木椎のやうに大きくて、下半身の短かくすぼまつた、畸形に類した、不思議な體格の持主もあつた。さういふ人間三分に化物七分といつたやうな者共が、自分の面相骨格を棚に上げて、他を顧みて『あばたの朴念』などゝ言つて、得意に興がつて居るのであつた。

無智なる人足共の間にあつては、さうした言動も、罪が無いとしたところで、立派に兩刀を差した、中で重立つた者共の間にすら、時代の生んだ所謂『出來出頭人』といふやうな言葉の能く當嵌る、物を知らぬ人間、或は如才無く立廻るのが當世だといふやうな、人間の寄集りであつた。——土を掘返す鶴嘴の音、石を切る鑿の音春を擔ぐ掛聲。監督者の疳走つた聲などの混つた騷がしい音響が、此の間に流れ漾つて、人氣の惡い新開地氣分といつたやうなものを、極度に遺憾なく漲らせて居るのであつた。

自分の生れぬ前から、相當の家柄をなして居た家庭に育つて、さうして由緒の正しさから來る、或る落ちついた床しさの下にある主家に、幼年の折から仕へて、おひ〳〵成人しながら、それですらともすると、人情の表裏、周圍の冷たさといふやうなものに、嫌厭らぬ感じを以て居た宗房にとつては、斯のやうに、何方を向いて見ても、『汝は一體何者の子か』と言ひたくなるやうな、節度の無い險惡な渦中に居ることが、凄じくなつて來た。

二十

上役に對しては猫のやうに諛ひ、配下に對しては苛酷なことを敢てして、それで

毫も怪まないといふやうな、變な人氣の中に幾月出入して居ても、或はまた是から先き永く立交つて居ても、到底其の空氣に昵ませない、同化させない、教養が宗房の胸中に嚴として存して居た。

彼は其の對者の上役であらうと、また人足であらうとに拘はらず、必ず謙讓と禮儀とを以て、是に應酬することを忘れる譯に行かなかつた。けれども相手の自分に振舞ふ言動は、これに少しも篏らなかつた。多くは粗暴であり不躾であつた。彼は自分に嗜みを守つて居るだけに、先方のその言動を快く思へなかつた。總じて此の集團に流れ漾つて居るものは、荒削の儘の野性の流露でもなければ、洗練された情誼の交驩でもなく、たゞ擦れた荒んだものゝ羅場であつた。

彼は自分から働きかけて、兎もすると不快を味ふやうな結果に終るよりも、必要でない限り、なるべく口を噤んで、話をしかけられゝば、それに答へるに止めるといふ風に、自づとなつて來た。けれども、さうすればさうしたで、また別な調子の

合はぬ感じを、周圍の人々に起させるやうになつた。斯うして双方で、何處まで行つても妙に合はぬ、氣分と氣分との、どう〳〵回りをやるやうになつた。

日を經れば經るほど、彼は其の集團の空氣から離れて行つた。恰も振蕩された水と油とが、元の靜平に歸るにつれ、各自の性質に有つた比重によつて、明らかに其處に差別を示すやうに、其の集團の空氣から離れて行つた。

節度の無い彼等から、不用意に蒙る言葉や振舞によつて、或時は折角心に湛へた靜けさ水面を無氣に搖りこぼされるやうな感じがした。或時は百姓に、泥草鞋で青疊に上られたやうな氣がした。

封建制度の餘弊から來た、一種滑稽に似た厭ふべき階級思想や、甚だ意味をなさぬ因襲等を嫌つて、すべて平等に自由に打解けて、伸々として生きて行かうとする平民的な考へを持つた彼ではあつたが、斯うした群集の中に立交つて見ると、其の一人々々の生ひ立ちといふやうなものが、あまりに鮮かに箇々の上に現はれて居るので、本當に社會の人々が、同じ教養に淘げられるまでには、到底其の人一代ぐらゐの短日月では、改造さるべきものではないといふやうな、父祖から洗つて來る胎教的の考へさへも起つた。

併し宗房には、萬人を指導し、社會を改善しようといふやうな、經世家らしい踏ん張りはなかつた。或は機を見て、高官にも上りたいといふやうな考へはあつても、それは畢竟彼の若い覇氣の致させる野心であつて、元來靜かな詩人に生れついて居る彼は、他に強ひる何物をも有たなかつた。たゞ退いて自己を、自己に適つた澄心の世界に置き、來る者は拒まず、去る者は追はずといふ風の、淡い而も純な親しみを、他に寄せることだけしか知らぬ人であつた。

熾烈な奪闘力とか、執拗な野心といふやうなものに至つて薄く、極めて非實用的の人物に出來て居る自分であるといふことを、だん〳〵に覺つて來た後は、斯うした集團に居ることが、出世の緒になるどころが、だん〳〵自分の理想から遠かつて

行くばかりであることに氣がついた。

彼は自分の生涯を、活かすか殺すかの行き詰つた岐路に立つた。さうして自分が信じて一歩踏み出した方向に、決して誤の無いことを心に確めた。水陸兩棲の動物のやうに、世間的と出世間的との二重に行かうとしたことの、そも〳〵間違つて居たことを明らかに考へて來た。

月明の空のやうに、ほの〴〵と白んで來た彼の心頭には、自分は生れながらの詩人であつたのだ。詩を作る以前から、既に詩人であつたのだといふ、本來の面目を、漸く確實に己(おのれ)に見出した。

彼は間も無く、土木監督といふ、水道工事の小吏の職を辭してしまつた。

二十一

まだよく馴れもしない江戸の眞ん中で、浪人になつてしまつた彼は、心持は樂になつたが、日々の衣食の道に窮して來た。そこで筆耕をして僅かばかりの料金を貰つたり、俳諧の添削をしてやつて、一食の馳走に預つたりしながら、本郷や日本橋や本所といふ風に、それからそれへと轉々流浪して、晝でも鼠が梁を鳴き走るやうな、天井も無い汚ない裏二階などを間借りして、京都時代よりも、もつと陰慘な不安定な生活を續けた。

斯うした境遇が、當然目の前に來ることを豫期せぬ宗房ではなかつたが、明けても暮れても、其の餘りに貧寒な生活に入浸つて見ると、あぢきない心細さを覺えることの無い譯にばかりには行かなかつた。其の遣り場の無い寂寥を忘れるが爲めには、米を買ふ錢で酒も飲んだ。世話に碎けた洒落や輕口のやうな、厭に飄逸がつた文字の遊戯などまでもついするともなしにした。併し心にも無い、斯うした淺浮な亨樂は、要するに空虛な哄笑に止まつて、眞に心の潤(うるほひ)や慰とはならずに、あぢきな

さは依然として、其のあぢきなさにあつた。

秋風の身に沁む頃になつても、一枚の單衣を着たまゝで居るやうな、貧しい生活を續けて居るうちに、彼は不圖一閃の靈光を直視した。――何時の間にか自分は、氣を腐らせ心を墮落させて、內省の前に目を眠りかけて居たのだ。自分で自分の面目を否定するやうなことをして居たのだ。いけない〳〵――。斯うして何物かの啓示に觸れて、また〳〵回心の一轉機に擡頭した彼は、惡醉から醒めて、倒れては起さ倒れては起さするやうな心を振ひ、天分の一切を提げて、前人の未だ到らぬ、立派な詩としての俳諧中に、深く〳〵索りを入れて行つた。其の努力は、血みどろになるほどの悲壯なものであつた。

忽然として三昧境は、彼の前に展けて來た。彼は確實に其の獨創の俳諧裡に開眼して、言外の妙境に其の核心を握つた。さうして宛ら、轉然大悟した僧が、思はず案を拍つた時のやうな、會心の悅に接した。

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮

彼は或る日、晩秋の景觀の裡に此の句を得た。さうして此の一句によつて、今まで脫げずに藻掻いて居た、從來の所謂俳諧の殼を、かなぐり捨てゝ、新生する機緣を握つた。是迄長いあひだ心に萠しあつて、捕まう捉まうとしながら、而も容易に捉み得る契機に接しなかつた或るもどかしさを、今漸くに捉み得たのだ。謂はゞそれは、彼が暗中に摸索して苦しんで居た正體を、不圖發見した刹那の、端的受胎の象徵であつたのだ。

薄つぺらな、或はあくどい從來の俳諧なるものから、漸く脫出することの出來た彼は、朝風に鬣を振ふ悍馬のやうな勢で、ひたぶるに全身を詩に燃して、其の眼前に展開された、曉の空のやうな爽かな詩の世界に、側目もふれずに、グイ〳〵と突き進んで行つた。最う其處には、下らない厭人の感情などから通り拔けた、滋潤した樂しい境地があるばかりであつた。併し同時にそれに反比例して、日々の衣食の

方面には、ます〳〵窮して行くばかりであつた。江戸へ出てから、最う八年の間漂浪して居るのだ。

ところが、身に襤褸を纏うて、内に詩の光輝を包んだ宗房に推服して、物質の援助を彼に與へたものがある。それは杉山杉風だ。杉風は幕府に食膳の物を納める御用商人であるが、耳が不自由だけに、却つて直に風流を解して居る、立派な紳士の一人であつた。彼は深川六間堀にある、自分の所有の別墅を宗房のために明けて、自由に起居するやうにして呉れたのだ。それに芭蕉庵といふ名がついて居た。元來芭蕉といふ植物に、愛を寄せて居た彼は、先づ其の庵號が氣に入つた。そしてもと、庭の隅に芭蕉のあつたといふ跡に、再び一株の芭蕉を植ゑた。

二十二

接して心持のよい杉風が、自ら進んで貸して呉れたからといふばかりでなく、芭蕉庵其者の風情が、宗房には總べて快適であつた。そして漸く處を得たやうな、落ちついた氣分になつて、自分の住むことを、以前から待つて居て呉れたやうな、蝸牛が其の殼を愛するやうな親しみを、庵そのものに持つた。

風が吹けば、其の吹くまゝに自分の葉は破れるに任せる。其の破れることが、寧ろ自分の生命であり力量であるかのやうな芭蕉を、毎日檐前に眺めて居れば居るほど、ます〳〵彼は此の植物に對して趣味を深めた。

其の葉は廣くて琴を蔽ふほどだ。或は半ば吹折られて、風に破れた扇のやうな趣も風情がある。花は咲かぬではないが花やかでなく、莖は太いが斧に當るやうなことがない。自分は芭蕉の葉蔭に遊んで、風雨に破れ易いのを愛する——といふやうな感想などを書いたりして、彼は自分の俳號までを『芭蕉』と稱することにした。そして世間的に謂ふところの功名心などは全く捨てゝ、髪まで剃り落して、非僧非

俗の姿になり、獨創の詩の世界に向つて、ます〳〵深く匕首を入れて行つた。

晩かれ早かれ、形あるものは必ず滅する時が來る。觀じ來ると、いづれ此世に幻で無いものがあらうかと人世を諦視した彼は、此の環堵蕭然とした、僅か六疊一間に狹い臺所のついて居るだけの、漸く體を入れ得るに過ぎない草舍も、彼にあつては如何に快いものであつたか知れない。彼は眞に詩人の自覺を得たと同時に、性情までが愈々おつとりとして來て、世に對し人に對し、和親の德を加へて來た。

江戸の俳諧も、矢張り京阪地方の餘瀝を嘗めて、文字の遊戯、事物の茶化、觀念の突飛な結合といふやうなことが、俳諧其者の全部とされて、宛ら塵だけの骨董を見るやうな觀を呈して居た。けれども能く洞察すると、それは從來の風潮の餘沫であつて、其の奥底には、後年實現する(元祿復興の)活々とした思想の潮流が、是までの眠から早くも目覺めかけて、新たに勢力を得た市民の情神を振作し、總ての因習から脱すると同時に、文藝の上にもまた古い型を破つて、鮮かに五官を洗ふに足り

る何物かを、新たに求めやうといふ氣運が動き初めて、暗々裡に高い脈を搏つて居るやうに彼には思へた。

芭蕉の瑞々しい新詩風は、江戸の天地に凉しく流れかけた。從來の檀林風の陳腐な俳諧に嫌厭らなくなつて、新たな思想の上に息吐くことを求めつゝあつた新人達は、芭蕉の握つて居る藝術に、おのづから觸れて來た。全身を詩の一路に活かして眞實に萬象を徹見することに努めつゝある彼の氣魄は、沈澱の底に低回しつゝあつた江戸の思想界を、斯うして歩武肅々と風靡し初めた。

遠近から來て、彼の門に出入するものが、日に〳〵多くなつて來た。其角、嵐雪などが其の尤なものだ、卜尺も居た。甲州の富豪で、而も諸藩に出入して儒學を講じたり、傍ら茶道、香道、謠曲などにも通じて、嘗ては芭蕉と共に季吟門下の双璧と謂はれた素堂も、初めは上野東叡山の邊に居たのを、後では態々葛飾の方へ引越して來て、芭蕉に肩を入れて、新興俳壇のために大いに努めた。

素堂の居る葛飾の住居へは、芭蕉庵の前に湛へられた堀割から、小名木川に出て舟で行かれるところなので、二人はよく川上と川下とから訪ねたり、訪ねられたりして、親しく交つた。

芭蕉はます〳〵自己の詩境を、深めて行くことを怠らなかつた。江戸に出て來た當初の頃までは、杜少陵や李太白の酒落な方面ばかりを見て、それを理想としたり、莊子の曠達なところを見て、それを喜んだりして居たが、何時とはなしに思想は變つて來て、杜の最も特色である沈鬱の方寸に入り、李の清淡な心絃に觸れ、莊の玄微な哲學に教へられ、或はまた、世を高く遁れて、而も世のために涙を流すことを惜まなかつた寒山の、法味に溢れた詩風などを喜ぶやうになつて來た。

彼の風格の冴えるに從つて、門下はます〳〵國中に殖えて來た。彼は夫等の人々に對して一々言說を試みようとはしなかつた。併し問はれゝば、『響、匂、位、この三つを主とするのがよからう』とか、或は『寂びしをりの細みが大切である』など

と答へた。

彼は、心に住する處の無い、朗らかな境涯に居るには、富よりも寧ろ貧に滿足するに限ると思つて、生活の道をより以上安定にしようといふやうな考へを避けた。けれども腹の空いた嬰兒の唇には、おのづから乳房が運ばれるやうに、自然の生命力は何等の無理もなしに、彼のために能くこれを防いで呉れた。

門人達は、別に相談するといふこともなく、それ〴〵の志て、米や味噌を彼の許に届けた。炊事は淨求といふ道心が家僕となつてして呉れた。門人の曾良も近所に住つてゐて、朝夕來ては、薪を割つたり水を汲んだりした。淨求は少し愚鈍だが正直な男であるし、曾良は温順で物靜かな性質であつたから、芭蕉の日常は、是等のために、毫も其の心生活を亂されるやうなことがなかつた。

鼠が家の中を荒して、どうにも始末にをへない時などは、今夜猫を貸して貰ひたいといふ手紙を書いて、門人の許に持たせてやることなどもあつた。

常陸鹿島の根本寺の住職である佛頂和尚が、暫く江戸に出て來て、深川の大工町に居つた。生命の空疎を充たし、詩想に重みを培ふには、先づ其の根柢に於て、廣く深く、強く大きい『無限の力』を摑まなければならない。それには禪に參ずるに限ると思ひついた彼は、通つて和尚の許に提唱も聽き、入室もした。

『瑠璃殿上無知識』とか、或は『風動槐安樹下夢』といふやうな語錄などによつて、知ることは許されないが、而も信じない譯に行かない、理知を超越して彼方に絶對な永遠の相を窺はせられた。

また、老子や莊子の精神も味索した。——南海の帝の儵と、北海の帝の忽とが、中央の帝たる渾驩の沌待を受けて、それに酬いるために、人間には七竅あつて、見たり、聞いたり、食つたり、息したりして居るのに、渾沌はのつぺらぼうで目鼻がないから、一つ禮心に七竅を穿つてやらうといふことになり、一日に一竅づゝ鑿を加へて行つたところが七竅を穿ち終つた七日目に、渾沌は默つて死んでしまつた——と謂ふ偶

言や、『知る者は言はず、言ふ者は知らず』といふ意味などに、どれほど彼は考へさせられたか知れない。

斯うして彼は、靜かな芭蕉庵の春秋を、來訪者の無い限り、自分の獨坐の姿を內に見つゝ暮した。

朝顏の花は日に〳〵小さくなり、晒した布などの一しほ白く涼しく見える秋が來た。或る夜彼が深更に目を覺すと、風にまじつて、雨がどしやぶりに降つて居るのであつた。室內で夜具にくるまつて居ても、秋に衰へかけた愛する芭蕉の葉の、傷み破れつゝ顫へて居る樣が、まざ〳〵と感じられた。非自己の植物までが、皆自己になつて來た。

芭蕉野分して盥に雨を聽く夜かな

彼はなか〳〵眠れなかつた。

二十三

門下の中でも、其角は傑出して居る一人であつたが、朝から晩まで酒ばかり飲んで且つ大の放蕩者で、酔へばすつかり傑くなつてしまつて、自分の長所を誇り、他人の短所を罵り、さうして無暗に豪放がつたり、江戸通を振りまはしたりして、常軌を逸するとこも少くなく、謂はゞ都會人の惡い方面を代表して居るやうな一癖があつた。芭蕉の許へも、折々熟柿の息を吐きながら、人を凌ぐやうな横柄な態度でのさばり來て、翌日になると閉口して、頭をかきながら陳謝に來るといふやうなことも珍らしくなかつた。

或時も其角は、吉原に入込んで、酒色に流連して歸るを忘れて居た。父の東順と

いふ人が。其のことを知つて、非常に心配して、蹤て懇意の人を二人頼んで、忠告をしに行つて貰つた。

酔眼に二人の顏を眺めた其角は、何のために此處へやつて來たかを、直ぐに覺ると共に、彼等が豫て俳諧を食ひかぢつて居るので、例の癖を出して、ぐつと反身になりながら

「あんた方が、若し私の放逸を咎めようといふならば、先づ私の吐くところの俳句に對して、能くこれに次して見なさい。幸ひにそれが、私の意に適つたならば、唯々諾々首を下げて、あんた方の言ふことに、何なりとも服從しよう。さて私の句だが——えゝと——

草の戸に我は蓼喰ふ螢かな

といふのだ。」

遊女の膝に片肱を凭らせながら、身を斜にして酔眼を剝いた。

二人は手がつけられず、いゝ加減に其の場を濁して、そこ〳〵に引上げて來て、東順に其のことを話した。東順が我が子の傲慢に呆れ返つて居るところへ、嵐雪がやつて來たので、愚痴をこぼした。今更初まつたことではないが、嵐雪にも仕樣がないので、先づ芭蕉の許へ行つて、其の始末を話した。

「また病氣が出たかな。」

「蓼喰ふ螢とかいふ句を振りまはして、威張つて居るのださうでございますが、御高吟を頂けませんてせうか。さうすれば私が吉原へ行きまして、きつと彼を連れて歸りますが。」

「承知しました。困つた男だ。」

言ひながら芭蕉は料紙に何かを書いて、嵐雪に渡した。嵐雪が吉原の大門を潜つた頃は、最う日暮方で、廓内には無數の燈火が瞬き、ちよつと見れば賑かなやうな、よく見れば寂しいやうな、不夜城の光景を呈しかけて居た。聞いて來た青樓を尋ね

當てた。

酒の香と脂粉の匂とが漾ふ、濃艶にだらけた一室の銀燭の下に、小太りの其角が茹蛸のやうに皮膚を赤くして、目を据ゑてとろ〳〵になつて居た。

『おゝ嵐雪か。はて、何か胸に一物を齎して來たな。御高見てもあるなら承はらう。』

まるで唖嘩腰である。温厚な嵐雪は避けた。

「私も一緒にまぜて貰ひたい。あんたのやうに澤山酒はいけないが、興を殺ぐやうなことはしないから。」

「そんならば宜しい、一緒に飲まう。」

「酌をしよう。」

「どうだ、俺の花魁は美人だらう。」

「うむ美しい。』

嵐雪は倦まずに、いつまでも其角の相手になつて居た。だん〳〵更けて來た。夜

が商賣の廓内も、身のつまされるほど森閑として來た。空行く五位鷺の聲までが聞える。賑かな場所柄だけに、更け切つては其の反動の寂しさが著しい。

其角は何を感じ出したのか、妙に滅入つて來た。

「此處へ來て、今日で幾晩になるかね。」

と嵐雪がいふと、其角は、厭なことを聞いて呉れるな、といふやうな顔をしながら

「四晩か五晩にならう。」

と、尚更沈んで來た、歡樂の果ての哀情を覺えた樣子だ。嵐雪は默つて見て居た。

其角は思ひ出したやうに言つた。

「つい御無沙汰をしたが、深川の師匠にはお變りがないか。」

「お變りがない。門下の人々も絶えず出入して居る。見えないのはあんたばかりだ。」

「さうか。何か私の身の上のことでも言つて居られたか。」

「あんたが、蓼喰ふ螢の句を詠んだと人傳てにお聞きになつて、非常に感心なされ

た。天下の俳諧を振作する名句だとまでお褒めになつた。さうして、是をあんたに届けて呉れとて、私にお托しになつた。」

嵐雪は懷中から、芭蕉の封書を取出して、其角に與へた。其角の眼は光つた。開封して見ると

朝顔に我は飯喰ふ男かな

といふ句が出た。幾度も口の中で吟じ返して居た其角は、急に座から棒ちに突立ち上つた。

「俺は歸る」

と叫びながら、女のらしい着てゐた華奢な寢卷を脱ぎ捨てゝ、自分の衣服を亂れ箱から取出した。

「師にも父にも濟まなかつた。あんたにまで心配をかけた。」

嵐雪に手をとられて、其角はぐり〳〵した目に涙ぐんだ。

二十四

冬に入つた。其の日は朝から雪空で、どんよりとした寒い空の奥に、日の影は隱れて天地は暗色を帶びて居た。午後になつたところが、案の狀綿のやうな雪が落ちて來た。だん〳〵時が經つにしたがつて、雪の降り方は密度を增して來た。日暮に間もなくなつた頃には、庭前は池の面だけを殘して、垣根にも、樹木にも、庭の上にも、四五寸ほど眞綿を置いたやうに白く積つた。芭蕉庵は雪の靜けさの裡に包まれた。

門人の依水が、足駄の齒に詰つた雪を、門口の石に叩きながらやつて來た。心無く孤獨を犯されることは好まないが、而も人懷かしい芭蕉は、誰ぞ訪ねて來て呉れるものはない　かどゝ、當ても無く人待ち心で居た矢先なので、大層喜んだ。

火鉢に炭などをつぎ足して居るところへ、泥芹がまた訪ねて來た。するとまたまのあとから、苔水や友五などが、續いてやつて來た。別に相談して訪ねて來た譯ではないのだ。『雪など降ると、誰しも同じ心持になとる見える』などゝ思つて、芭蕉は嬉しく思つた。

期せずして集つた、同じ心持の人達は、外氣の寒いにも拘はらず、障子を一二枚明けたまゝにして、小鳥の胸毛でも散したやうに、チラ〳〵と降る雪を眺めながら打ちとけて火鉢を圍んだ。日はとつぷりと暮れて、まだ燈火を點けない庵の內は、薄すりと雪明(ゆきあかり)がした。

「寒いから酒の少しも飲み、溫かい物でも食べたいが、何の用意もしてなかつた。皆して手分けして、奔走しようかい。」

と芭蕉が言ひ出すと、一座の人々は膝を打つて

「それは面白いお思ひつきでございます。」

と賛成した。彼も興を覺えて

「では、先づ私が米買ひの役に當らう。」

と言つた。人々も六層面白がつて、師匠の米買に行くといふのを止めなかつた。そして皆の役割も決つた。依水は薪を買ひに出かけた。苔水は酒を買ひに出かけた。友五は豆腐を買ひに出かけた。味噌や醤油も足らなさうだといふので、泥芹が其の補充に出かけ、ついでに近所の曾良を呼んで來ることになつた。

其日は、一同行燈の下に圓居して、夜更けまで樂しく語り續けるのであつた。酒に微醉して快くなつた一同は、一しほ芭蕉に親しんで、句作上の參考になるやうなことを、何なりと口授して貰ひたいなどゝ、せがむやうに言つて肯かなかつた。彼も樂しい儘に、念頭に浮び來るまゝを、秩序も立てずに語つた。

「句は無暗に作り過ぎると、却つて其のために、心の直きを失ふことになりがちだ。心の作は好ましいことだが、詞の上だけでの作は宜しくない。つまり句作には『成る』と『成す』との差別がある。常に内に勉めて、物に應ずると、其の心の色が現はれて句はしい句と成るのであるが、これに反して、常に内に勉めることを忘れて居ると、句といふものが自然に生れて來ないために、止むなく私意を挾んで强ひて句を成すやうになるものである」などゝ言つた。

「世間には俳諧を以て、今なほ卑言俗語のやうに信じて居る者が多いやうだが、これは俳諧は卑言俗語を用ひるに限るやうに思ひなされて居た、從來の謬見から生まれた弊害であつて、寧ろ其の卑俗な言語を矯正するところに、俳諧の立派な存在があるのだ。つまり素朴な古代の人の心情が、其儘流露して居る萬葉集のやうに、貴賤の別無く、男女の別無く、皆能く遊び味はふところに、眞の俳諧の生命はあるのだ」

などゝも言つた。

一同の、酒後の快さゝうな顔を眺めまはして

「酒は賑はしくてよいものだ。茶は靜かなもので、また別な趣がある。餅は何となく景氣のよいものだし、飴は子供らしいものだ」などゝ言つて笑つた。

森々とした夜深い戸外の氣配によつても、雪が止まずに降り積つて居ることが、音の無い音に知れた。

二十六

春といふのも名ばかりで、如月の風の寒く激しく吹き荒ぶ日であつた。俄かに江戸の市中が大火事になつた、本郷駒込の大圓寺から起つた火は、折柄の面も向けられぬやなう颶風に煽られて、躍り狂ふ無數の大蛇の舌のやうな、物凄い火焔を四方八方に吹散して、見る限り一面の火の海と化し、火元の本郷はいふまでもなく、下谷から神田、日本橋に燃え移り、一方は淺草方面を一ト甜めにしてしまひ、それで足らずに、猛火の惡魔は、更に隅田川を越して、本所深川の一部にまで擴がつたのであつた。芭蕉庵も無論のこと、一握の藁ほどのこともなく燒かれてしまつた。

下男の淨求や、門人の曾良に擁されて、小名木川を舟で下つて、葛飾の素堂の家に避難した芭蕉は、漸く鎭火して數日を經た後、再び市中に戻つて來て見た。

自分の小庵などの燒失したのは未だしものこと、奥床しく樹木に蔽はれてあつた大厦高樓といふ文字其儘の立派な大名屋敷も、黑光りのする嚴丈な土藏を、幾棟も控へて居た大きな老舗も、或は半年も一年もの間、多數の大工や左官が入込んで、槌の音鉋の音勇ましく、普請を續けて漸く出來上り、道行く人に其の景氣の好さを仰がせた、新築したばかりの大商店も、一蓮托生といふ風に灰燼に歸し、昨日まで

人家櫛比して、殷賑を極めて居た大江戸の繁昌は、消えて跡方も無い一場の夢となつてしまつた。

そればかりではない。これに伴ふ種々の哀話も耳にした。火煙に包圍されて、遁場を失つた富豪が、俄かに氣を狂はして、持つて立退かうとした、懷中の小判を掴み出して、ゲラ〳〵笑つて四邊に撒き散しながら、其儘赤い火の中に呑まれてしまつたとか、火事に驚いた姙婦が、急に産氣づいて嬰兒を生み落し、臍の緒の繋がつた儘で、諸共に黑焦げになつて死んだとか、或はまた、一所懸命避難する男の背中で、其の母らしい七八十の老婦が、早く遁げて呉れとあせつて、兩手で男の頭を亂打して居たとか、無數の人が押し合ひへし合ひ、我先にと渡りつゝあつた橋に火がまはつて、俄然として河に落ちたとか、其の他慘鼻を極めた話は、數限りもなかつた。

斯うした幻滅の大きな悲劇を、目のあたりに見せつけられた彼は、富貴も全く當

てにならない。そも〳〵人生其者が、既に火宅なのだ——といふことを、今更のやうに痛感した。

火事に燒かれて惜むほどの、何物をも有たなかつた彼は、一ト先づ甲府へ行くことにした、それも矢張り杉風の計らひであつた、杉風は等しく自分の家を燒失して、善後策を案じながらも、推服する芭蕉の身の上に心を懸けて、自分の妹の嫁いで居る甲州へ、兎に角彼を移らせたのだ。

同じ頃、芭蕉と共に、佛頂和尙に參禪して居たことのある、六祖五平といふ舊知も甲府に引込んで居たので、初めての土地ではあるが、彼にはそれ〴〵の便宜があつた。一年ばかり過ぎた。

二十七

深く山に圍まれた盆地にも、遲いながらに春が來て、櫻の花や菜の花が、麗かな陽光の下に咲いた。目睫の間に見える裏富士の雪も、大分消えがちになつて、山膚の黑い箇所がだん〳〵多くなつた。單衣を着る若葉の季節が來て、やがて梅雨にならうとする頃、江戸から其角が手紙を寄越した。

門人達一同の希望であるから、どうぞ早く當地に歸つて來て貰ひたい、といふ文面であつた。彼は其の勸めに從つて、また江戸に出て來た。最初に會つたのは杉風であつた。杉風は久方振に芭蕉を見て、非常に喜ぶと同時に、氣がゝりさうな顏をした。

「こちらから上げました書面を、御覽下さいましたか。」

「江戸に歸つて來るやうにとの、其角からの手紙を見ました。」

「それではありません。貴方の御不在のことを御存じないらしく、御鄕里から御寄越しになつた、御書面でございます。私が落手いたしまして、更に甲府の方へ御差廻し申したのでしたが。」

「それは見ませんでした」。

「今お着きになつた日取を考へて見ますと、恰度彼地を御出發になつたあとへ、行き違ひにまゐつたやうに思はれます」。

杉風は無論、其の手紙の內容は知らなかつた。どんな便りかと、芭蕉が多少氣がかりで居るところへ、其の書面が折り返して戻つて來た。廻り廻つて皺だらけになつた封書を披いて見ると、母の死んだことが、兄の手跡で認めてある。彼は書面に落して居る、自分の視覺を疑ふほど、胸を冷やりとさせた。

人より深い孝心を有ちながら、其の親を思ふ心を、其の思ひの儘に、表に現はすことの出來ぬ性癖の彼であつた。併し離れて居ても、一日として母を忘れたことはなかつた。現に大火に會うて、一時江戸を去つて甲府に行く際にも、自分の身の無事なことを鄕里に文通して置いて、更に別にさりげの無い書面を幾通か認めて、杉風に托して、時々伊賀に出して呉れるやうに賴んだのも、自分では假りの滯在のつ

もりの出先から、慈ひの便りなどをしたがために、却つて『何故江戸を離れて、甲府とやらなどへ行つたのだらう』といふやうな、餘計な氣苦勞をさせたくないがためであつた。

並々の人とちがつて、偉い考を持つて居るお前なさうだから、出世のためとあれば、無理に女々しく引止めるやうなことはしない。たゞ此の通り年も取り、それにお父様にも亡くなられた寂しい身なのだから、どうぞ文通は絶やさず、また時には歸省もして貰ひたい――伊賀を出て來る時の、母の言葉が彼の耳に殘つて居る。

江戸に出て來てから、文通だけは時々折々に、絶えずして居た。母の方からも、彼が江戸の眞中で、俳人として嶄然頭角を現はした功名を、蔭ながら喜んで居るといふ旨を認めて、彼を勵まして寄越すことも度々あつた。墨の色の鮮かな母の手蹟を見るにつけ、また兄やお雪からの手紙によつて、母の健かに暮して居ることを知るにつけて、つい安心して、殆んど十年の間、歸省といふことは一度もせずに居たのであつた。

逸れた自分の性分から曩には父の死目に會へず、今また母の死目にも會へ得なかつた彼は、泣くにも泣かれぬやうな、言ひやうの無い感慨に打たれた。けれども最う追つゝかない。兄からの訃報が、伊賀から江戸へ、江戸から甲府へ、甲府から更に江戸へと廻り廻つて居たゝめに、日數は夥しく經過してしまつた。死目に會へなかつたのは無論のこと、葬儀すら既に濟んで居ることは分りきつて居る。

今更慌てゝ歸つて行つたところで、それは、事が過ぎて漸く靜まりかけて居る家の人々の悲しみを、また新たにさせるだけのことだ。自分が母の死に赴かないことを、緣者が一樣に憾みに思つて居るであらうが、其の詫をするのは寧ろほとぼりのさめた後にしよう。それにしても、なぜ前以て知らせて寄越さなかつたものか。愈亡くなつたにしても、書面などでなしに、飛脚でも立てゝ呉れなかつたものかなどと思ひながら、掻き抱くやうに母の俤を念じて、心の中で掌を合せた。

二十八

江戸に歸つて來た芭蕉のために、再び草庵を建てゝ、それに住んで貰はうといふ相談が、門下の人達の間に持ち上つた。そこで素堂が主となつて、回狀を認めたところが、有志の人々が五十餘名にもなつて、豫定通りに草舍を建てることが出來た。中には小机を寄附するものもあつた。筆や紙を持つて來るものもあれば、手鍋などを置いて行く者もあつた。

芭蕉は自分に盡して呉れる人々の深切を、此上も無い有難いことに思つた。庵は以前に燒けたのよりも、更に簡素なものであつたが、『良田萬頃日食二升、大　高樓夜

臥八尺』といふやうな意味を、眞實に體得しつゝある彼には、これすら勿體無いくらゐの住居に思はれた。たゞ庭前に、愛する芭蕉の一株の無いのが物足りなかつたので、求めて又植ゑた。

草原の一樹のやうに、俗流俳諧師の群を拔いた彼が詩風と、虔虛和親な其の風格とを慕うて、門下に參ずる者が益々多くなつて、今では全國を通じて千人以上にも上つた。併し芭蕉の是等門人に對する態度は『若し自分の內に、攝つて養とあるものがあるならば攝るがよい。無くなつたら捨てるもよい』といふ風に、サラリとして居た。

各自の特有する天分を、其の天分の儘に育てようとせずして、徒らに他に倣ふといふやうなことを、彼は好まないから、强ひて自分の型に篏めようとはしないが、質義があれば答へぬではなかつた。『句の仕立やうは、五尺の菖蒲が、池の水から、スク〳〵と生ひ出たやうに、少しも滯るところなく、丈高くて、口にさはらぬやう

にするがよい。』或は「乞食は汚れた袋一つより持たないで、食ふべき物は何によらず、其中に收めて常にはしまつて置き、入用になつて初めて之を取出す。俳諧もまたこれと同じで、和漢の學問でも、あらゆる世事でも、能く見聞して置かなければならないが、强ひて用ふべきではない』などゝ言つたこともある。

必要に迫られて、箇條書のやうなものを認めたこともある。『樹下石上に露宿するやうな場合があつても、温かい莚と思ふがよい——。腰に寸鐵たりとも帶びてはならない。植物に限らず、虫けらといはず、總て物の命を取ることは惡い——。衣服や器財は身分相應がよい。過ぎるのもよくないが、足りぬのもよくない。程あるのがよい——。他の求めが無いのに、自分の句を出したりしてはいけない。併し所望されて拒むのも宜しくない——。問はれもしないのに、說くのは宜しくない。問に答へないのも亦宜しくない——。他の短所を擧げたり、自分の長所を顯はしたりするのは良くない——。婦人の俳友とは深く交はらないがよい——。俳談の他あまり雜話はせぬ方がよい。雜話が出たなら、居眠して勞を養ふに限る——。一宿一飯の主もおろそかに思ふな。併し諛び諂つてはいけない——』。

二十九

芭蕉は早う四十を越して居た。『初老』といふやうな言葉が、新らしい響を齎らして、彼に沁々と人生を思はせた。江戸に出て來てから、前後十年以上になる。其の間には、種々の境遇に遭逢した。併し終始一貫して、我を我が心の向ふべきに向けて、其の信念を守り、育て、深めつゝ來つたことに、殆んど變りが無かつたと言つても可い。彼はこのことを思つて、いひ知れぬ或る胖かさを覺えた。

生れながらにして有つた自己の天分の、何であつたかを究めることを得て、さうして其の天分を、自己に肯ける程度にまで闡明し得た彼は、此頃になつて幼馴染の故郷の風物が見たくなつた。兩親の墓前にも額づきたくなつた。

季が秋に入つてから、餘程日數を經た頃だ。彼は一緒に行きたいといふ千里を供に連れて、西に向つて旅立つことにした。昔の旅人の謂つた『千里に旅立つて旅粮を包まず、三更月下無我に入る』の心持は、直ちに彼の心持であつた。彼は旅立つとなつても極めて無雜作で、僅かに紙子の上に茶の道服を着て、切りつぱなしの椿の杖をついて、片手に檜木笠を持つたゞけだ。併し其の顏色には、行く先々の旅の空と、一如に溶けて安らはうとする、寂しく樂しい內部精神が匂つて居た。

野晒を心に風のしむ身かな

箱根の關所を越える頃は、秋雨が霧のやうに降つて、左方の山を見ても、右方の湖水を見ても、たゞ冷たく煙つて居た。雨空は幾日も續いて、三島から東海道筋に

出ても富士の姿を仰ぐことも出來なければ、興津の海を見渡すことも出來なかつた。

毎日行脚を續けて、一宿する夜毎の旅舍に、退屈を覺える折などは、江戸を立つ時に、一笑が贈つて呉れた、水鷄笛を取出して、慰みに吹いて見たりした。時々取出しては、吹いて居るうちに、だん〳〵馴れて上手になつて、見ず知らずの土地の者に、旅藝人でもあるかのやうに、誤解されて苦笑したりした。

冷たい霧時雨の中を、笠傾けて雨具の襟を搔き合せながら、行き行つて、もう一二里で富士川へさしかゝらうといふ途中に、萱葺の農家が二三軒あつて、白い花や、淺紫紅の花をつけた木槿が、雨に濡れて咲いて居た。それが奥まつた方のは、花も葉も滿足だが、路傍に出しやばつた方のは、通りすがりの馬に食はれたものと見えて、滅茶苦茶になつて居た、彼は面白い世相を、此の槿花に見たやうな氣がした。

道のべの木槿は馬に食はれけり

富士川は雨のために水嵩を增して、濁つた流は急であつた。彼方岸に舟を乘りす

て、堤を斜にとぼ〳〵と上つて行つたところが、幼兒の泣聲らしいのが、何處か其の邊に聞える。變だと思ひながら、其の泣聲を便つて行つて見た。

雨に濡れた丈の高い蓬の蔭の、濕氣を含んだ冷たい地べたに、三つばかりの男の子が、つぎはぎだらけの着物を着せられて、どかりと尻餅をついたまゝ、何處を見るといふ當てどの無い目なざしをして、泣きつかれて惰性的に泣いて居た。

餘程以前から泣き續けて居ると見えて、聲は嗄れて、小さな喉は傷んで居る樣子だ、四邊の雜草には、秋に腹の脹れた螽斯(はった)などが眠とひつゝいて居た。

つい其處に茶店も見えるのに、なぜ誰も構はないのか、それとも氣づかずに居るのかと、不審に思ひながら、その茶店へ行つて訊ねて見た。

「彼處に小さな男の子が、一人ぼつちで泣いて居るが、どうしたことか。」

「あれですか、捨兒ですよ」。

亭主は無雜作に言ひ放つて、芭蕉の前に茶盆を運びながら、一向氣に止めない樣

子だ。彼は他人事でないやうな氣がした。

雨氣で冷える此の天候に、また堅まりもせぬ小さな身體で、あゝして居たならば生命にも拘はらうに、困つたことをする親もあつたものだ「。

「なあに、捨てる親もあれば、拾ふ親もありますよ。此の前にもそんなことがありました。」

亭主は矢張り無關心で居る。芭蕉は氣の毒でならない。

「拾つて呉れる者があるにしても、あゝして置いたのでは堪るまい。どうだらう、少しばかりだが、小遣を置いて行くから、せめて此家の軒下へ置いてやつては。」

亭主は神經は鈍いが、さして薄情者でも無いらしい。

「それもさうですな。連れて來て藁ても敷いてやりませう。」

と、矢張り無雜作に言つて、秋寒の大氣の中に、果敢なく泣聲を消して居る幼兒を、よた〳〵と裸足のまゝに歩かせて來た。芭蕉が菓子を與へると、見知らぬ顏に

おづ〳〵しながら、それでも手に握つた。腹も空いて居ることだらうに、幼ないながらにはにかんで、口へはもつて行かうとしない。

雨と、鼻汁と、涙とで汚なくなつた、幼兒の顔を見て居るうちに、芭蕉の心は悲しくなつて來た。憐憫の情が自ずと絡ひ交つてしまつた。老松に古猿の啼聲を聽いて、坐ろに涙を流したといふ、杜少陵の心情などまでが、沁々と思ひ合はされた。

たとひ兒を捨てゝも、其の兒が誰かに無事に拾はれるまでは、親の心は靜まらないので、必ず何處ぞの物陰に忍んで、泣きはらした目で見張つて居るさうだ——といふ話なども思ひ出された。

捨て去られてある跡に、其の子供だけを見ると、いかにも捨てた親が鬼の樣に思はれるが、併し捨兒をすべく決心するまでには、親はどんな思をしたか知れない。捨てる間際にも、子供を犇と抱き締めて、飽いて飽いて飲まなくなつても、なほ乳房を子供の口に押當てゝ、最後の乳を飲ませながら、咽せ入るほど悲泣したことだ

らう——とも思つた。

お前の親は、決してお前が憎いのではないのだ。思ひ詰めたよく〳〵の事情に攻められて、心を鬼にして、泣く〳〵お前を捨てたに違ひない。決して親を怨んではならない。お前が斯うして、冷たい處に泣いて居る以上に、親は何處かでお前の爲に泣いて居ることだらう——。彼は幼兒の顔をしげ〳〵と見ながら、心中に斯う言つて、此儘立去つてしまふことに、一種の自責を感じながら努めて心を冷かにした。

三十

大井川を越した日は、矢張り霧のやうな雨が催してゐて、芭蕉と千里とは、合羽

の袖を搔き合はせて、濡れながら行つたが、西行法師が、二度目の東下の時に『これも命があればこそだ』と感慨を洩したといふ、小夜の中山に、曉深く、馬をやとうて差しかゝつた頃には、雨雲がだん〳〵風に吹き拂はれて、下弦の月が細々と梢にかゝつて、秋に衰へて而も未だ散らずに居る木立の葉が、燻銀のやうに薄白くぼかされて居た。山の根際は暗く隈になつて居た。

『鞭を垂れて馬に任せて行く、數里未だ鷄鳴かず、林下殘夢を帶ぶ、葉飛んで時に忽ち驚く――』といふ、杜牧が『早行』の詩其儘の、爽かな情景であると彼は思つた。

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙

沖の波頭の險しく見える、遠州灘の海岸に添うて三河に行き、更に名古屋に出て、左方に控へた伊勢灣を、遠く半圓形に廻はつて伊勢に着いた。そして、風濤の家に十日ばかり滯在した。

山は深くはないが、大層景色が佳いと聞かされて、或日西行谷といふ處へ行つて見た。麓に綺麗な小川が、絹をのべたやうに流れて居たが、恰度村の若い女が、其の清らかな澄んだ秋の水で、里芋を洗つて居た。女の腕の皮膚も白かつた。洗はれた里芋も白かつた。それがいかにも季節に調和して見えた。

大廟の外宮に行つて、參拜しようとしたが、僧侶ともつかぬ、異樣な旅仕度をして居るので、社務所の人は、一の華表から奥に入ることを許して呉れなかつた。併し芭蕉自身は、杉や樟の梢を渡る、神々しい風の氣配を感じながら、遠くから心で拜むだけでも足りて居た。

附近の茶屋に腰をかけたところが、どことなく垢拔けのした其家の女將は、茶を汲んだり、煙草盆を出したりして、いろ〳〵と歡待した。そして厚意をもつた表情で、芭蕉等の樣子を見て居たが

「風流のお旅かのやうにお見受け申します。私はもと蝶と申して、遊女でございまし

たが、今では此家の主人の妻となつて、蘭と申して居ります。先代の妻も矢張り遊女上りで、鶴と申しましたが、ずつと以前に大阪からお出でなされました宗因様にお願ひ申して、――葛の葉のおつるの恨み夜の霜、と申す句を頂きましたさうでございます。お願ひでございますから、貴方様もどうぞ私に、一句を頂かせて下さいませ。」

氣さくさうに言つた。彼は

「宗因先生のやうな譯には行くまいが、何か書きませう。元はお蝶といつて今は蘭といふ名であつたね。」

蘭の香や蝶の翼に燻物す

女將の出した粗末な短冊に、矢立の墨ですら〳〵と走らせた。

「有難うございます。大切にしまつて置きます。」

女將は句の意味を彼に訊ねながら、子供のやうに嬉しがつた。

三十一

蕭々とした秋晩い風に、旅を續けた顏を吹かせながら、彼は實に久し振りで、故郷の土を踏んだ。十三年目だ。

兄は老人になつて居た。頭髪は眞白になつて、頰の肉もこけ、皺も深く刻まれて、偶然に途上でなど逢つても、ちよつとには見それるだらうと思はれる程であつた。それでもよく見ると、伊賀で別れた頃の、母の俤其儘に似通つて來て居たのであつた。町に入つて此家へ來る途中でも、昔在つた筈の建物が取拂はれて居たり、意外なところに四辻が出來て居たりした。其の他見る物聞くものゝ總てが、『時』の波浪に

流された跡――といふ風に、何處となく變つて、似つかぬ故郷になつて居た。さうして彼自身もまた、僧形のやうな初老の人であつた。

「斯うして會ふことの出來るのも、お互に壽命があればこそだ。」

兄は一言いつたのみで、言葉を曇らしてしまつた。

「有難いことに思ひます。』

芭蕉の胸にも感慨が徂徠した。いかにも氣の弱い人になつたらしい兄は、佛壇から守袋を持つて來て、紐を解いて、中から輪にした毛髪を取出した。そして彼の手に渡した。

「これは亡くなられた母の形見だ。拜んで下さい。」

悲しんで傷らぬ彼ではあるが、亡母の遺髪を掌に押戴いた時には、流石に目の中が熱くなつた。

「母の亡くなられましたあの節は、折角のお知らせを受けながら、不圖としたかけ

違ひから、御葬儀にすら間に合はず、申譯もありません。」

「いや、其のことだか、母の病氣が、今度こそ六ケしいと思つた時、早速あんたに知らせようとしたのだが、母が承知しなかつたのだ。何百里離れて居ても、宗房の心持は、私によく通じて居る。野に置け蓮華草といふことがある。並々の人と違つた考を持つて居る彼には、なるべくさはらずにゐてやれ。私が大病だからと言つて、態々知らせるやうなことは控へて呉れろ。若しまた死んだからといつて、急いで飛脚を立てるにも及ばない。廣い大江戸の眞ン中で、多くの人々から、道の師として仰がれるまでに出世した、彼の母であることを思ふと、私は其の矜だけで、毫しの思ひ殘すこともなく、安らかに目を瞑ることが出來る――と固く仰つて止まないのだ。それであのやうなことにしたのであつた。」

「恐縮の外ありません。」

「なぜ死目に會へるやうに、せめては葬儀に間に合ふやうに、取計らつて呉れなか

つたかと、あんたから責められはしないかと、私は却つてそれを苦にして居ました。」

「痛み入るお言葉です。」

逸れた自分の行藏に對して、母はそれほどまでに、理解をもつて居て呉れたので

あつたかと、彼は沁々として掌にある遺髮に見入つた。兄は其の樣子を側から見て

居たが、いかにも感に堪へぬものゝやうに

「私は無論此の通りだが、あんたの眉にも、どことなく老の影が見えて來たな。」

と、老いた兄弟の親密さで言つた。芭蕉はまだ四十を越したばかりであつたが、

顏には皺が多く、頭には白髮さへぽつ〳〵まじつて、年よりはずつと老けて見える

ので、兄の言葉は尤であつた。

三十二

別室から、物腰靜かにお雪が出て來た。

「お久しうございます。」

しとやかに手をついて挨拶した。元々芭蕉より、三つも年長なのだが、それが女

だけに一層變り方が著しかつた。昔も痩形ではあつたが、頰は豐かで、白い手指に

は凹みがあり、黑髮も匂つて居た。それが今見ると、體軀は尙更細けて、皮膚の色

艶も衰へ、髮も少さく引詰めて結ひ、若い日の面影などは殆んど無かつた。彼は昔

の戀人に會つたといふ感じよりも、寧ろ世を捨てて、淸らかにむ未亡人とか、刀自

とでもいふ婦人に會つたやうな感じがした。

「書けば言へば、却つて遠くなるやうな氣がして、永年の間、つい詳しい便りもし

ませんでした。」

「お心持は、よく私に解つて居るつもりでございます。」

落ちついた、品のよい物の言ひ振りをして、すべて諦の裡に安んじて居るお雪の

樣子だ。

「早いものだ。別れてから、最う十三年目になる。」

「貴方もお年を召されましたが、私も斯のやうに變つてしまひました。」

「永い間には、種々の心勞もあることゝ、察しては居ました。」

「いゝえ。只々貴方のお名の世に現はれましたことを、待ち得た心で蔭ながら喜んで居りました。お側に居りませんでも、心の糧はございます。」

「あんたも此頃は、大層句が上達したやうだ。」

「お揶揄ひになつてはいけません。」

お雪は、どういふつもりて附けたのか、自分て壽貞と名乘つて、芭蕉に化せられたものか、折々に作句をしては、江戸の彼の許へ寄越したりして居たのであつた。

「永年の間、親身も及ばぬお世話樣になつて居ります、お兄樣やお嫂樣に、貴方からよく御禮を申上げて下さいませ。」

兄は側から言葉を次いだ。

「お禮どころではない。お雪どのも、今ではすつかり家の人になり切つて、病身の妻を助けて、何呉と無く、面倒を見て下さつて居ます。それにまた彼のおふさが——。」

と言つて、ちよつと淀んだが

「あの子がまた大層私に昵んで、父親のやうにして呉れるので、子の無い私等老夫婦の寂しさを、どれほど賑かにして呉れて居るか知れません。——お雪どの、此處へお呼びなさい。」

お雪は、微かに面はゆげな顏をしながら、兄の言葉のまゝに、次の間の方へ立つて行つた。

子供といふのは、お雪が京都で芭蕉と同棲して居る頃懷妊して、此の伊賀の兄の家に來てから、芭蕉の江戸に立つたあとて、產み落した娘のことなのだ。

お雪に、肩へ手をかけられながら、田舍育ちの可愛い顏をした少女が、少し氣まり惡るさうにして、座敷に入つて來て、お雪の側に坐つた。

自分の實の父親の來たことを、母から聞かされたのか、聞かされないのか知らないが、お雪が顧みて、

「お辭儀をなさい。」

と言ふと、素直に兩手をついて、稚い輪髷の頭を行儀よく下げた。

「大きくなつた。丈夫さうだ。」

世間に反いた父を持つたゝめに、母の手一つで、田舍に育つて行きつゝある、罪知らぬ幼ない者の顏を見て、彼は言ひやうの無い、哀憐の情に打たれた。さうして富士川の堤で見た、捨兒のことまでが、胸に浮んで來た。

「此頃では大分役に立つてまゐりました。水も汲みますし、庭掃除もいたしますし、伯父樣のお肩も揉んで上げます。」

お雪が言ふと、

「素直な良い子で、お母さんの言ふことでも、私達の言ふことでも、よくききます。どんなことがあつても、此の子は側から離したくない。」

兄も眞から言ふ。

堂守の寒僧のやうな、素淡な生活を、江戸の草庵に續けて、俳諧の三昧裡に精進して居る芭蕉には、是等母子を呼び寄せることの、あまりに不似合ではあつたが、樣子によつては、相當の處置もせねばならぬといふ、責任も感じて居たのであつた。けれども思つたほどでない安堵を得た。彼は今まで通りに、總てを兄の厚意に、兄の言ふまゝに、任せることにした。

三十三

伊賀を出た芭蕉は、和泉境を大和路の方へ入つて行つた。葛城郡の竹の内といふ村は、同行した千里の故郷なので、こゝにまた暫く滯在した。それは竹林の奥の靜かな家であつた。

或日千里と一緒に、二上山の當麻寺に參詣した。

境内は森として、我が歩く足音より外に、音といふ音も無かつた。木立の繁つた中に、取り分けて大きな松の巨木があつた。幹の蔭に牛が隠れられるほどで、千年も經つだらうと思はれた。非情の樹木ではあるが、何と無く神々しく威嚴があつて、今日まで斯うして枯れもせず、斧鉞の罪をもまぬかれて、滴るやうな青色を呈して居るのも、矢張り佛縁に繋がつてゞも居るやうな感じさへして、植物とはいへ尊いものに思はれた。

松大の樹の下に、一緒に腰をかけて休んだのを名殘に、今まで永い間、旅を共にして來た千里と袂を分つた。

悠々とした雲水の間に、たゞ獨箇の旅人となつた彼は、地に吏く我、孤影を懷かしみながら、寂び細められた心で、天地自然を禮讃しつゝ、吉野山へと足を向けた。

今までに、こんな綺麗な水は、つひぞ見たことが無い、と思はれるほど、吉野川は寒く澄み切つて流れて居た。隨分深さうであるのに、底に散ばつて居る石は、青色のや、白色のや、褐色のや、黒色のや、胡麻鹽斑らのやが、一つ〳〵に劃然と見える。岩の岸に青く平らに落ちついた水が、斜にそれて再び流を成さうとして、境の砂の淺い河床を越す時には解けた薄氷でも流れるやうに、水がきら〳〵と盛り上つて見えたりした。

遠く河上を見渡すと、左右の山々が迫り合つて、幾曲りした其の奥の、遙か彼方に、巔の角ばつた伊勢の高見山が、青く夢のやうに特立して居る。

これから登らうとする、吉野十二峯には、銀の大塊を膨らましたやうな、白いむく〳〵と冴えた雪が、ところ〳〵に懸つて居た。

曲折した山路は、大して險しいとはいへないが、又なか〳〵登り易くもなかつた。下の千本と稱する、櫻樹の展がり連なつた領域を、左方の斜面に見渡した頃は、可なり最う登つて來て居た。

山は、櫻でなければ杉、といふほどに暗綠色に繁つて、山の姿を深めて居た。其の森林の奥の方から、木を伐る音などが、時々幽かに聞えて來た。南朝の皇居の跡は金峯山寺を右に行つた、或る一峯の山端にあつて、深い谷を前面に控へて居た。吉水院の前を更に登つて、一つ谷を隔てた、別の峯の懷に、如意輪寺や、杉の巨木に守られて、圍ひの石に苔蒸した、後醍醐帝の御陵などがあつた。僧兵の覺範が失意して落延びようとする義經を阻んで、吹雪の中に大身の薙刀を閃かしたといふ跡なども遠くは無かつた。

日は最う山の蔭になつてしまつて、四邊は暮色に包まれかけた。或る峯の中腹を傳うて、木の下道を竹林院の方へ出ようとしたところが、遙か彼方の眼下に、散り殘

りの紅葉を疎らにつけた、中の千本の櫻が、傾斜面に群をなして居た。それが薄紫の夕靄に一樣に煙つて、見やうによつては、花盛りの夕暮のやうにも錯覺された。

山の中だけに、氣温はめつきり降下して、着てゐる衣服の薄さが、坐ろに肌に感じられた。全山の處々に散在する、院々で撞く鐘の音が、初冬の空氣の中に、靜けく流れる。彼は其の夜、或る僧坊に一宿した。

夜は深々と更けて行つた。たま〳〵目を覺すと、彼れ自身の寢て居る僧坊は、全山の地表から、樹木から、空間から生ずる、死の如く靜かな霧圍氣の裡に包まれて、まるで、大海原の奥底にでも、刻々と沈んで行くやうな氣がした。

彼は、其の翌朝更に山奥に行つた。雲井坂を左にして、花矢倉を登る邊から、道は胸を突くほど險しくなつた。抱へるやうな大きな松の點在して居る間を、また更に二十餘丁も登つた頃、青根の高峯が眼前に首を現はした。朝霧は白く流れて居る。吉野の山頂は是で盡きたのだ。

道を前面に取れば、六里の險峻を大峯の靈嶽に行くのだ。彼は其處から右にそれて、松杉の暗い山の背を行つた。時代を遠く離れながら、而も隣人のやうな親慕の情を、常に寄せて居た西行法師が、其の昔一人幽かに住んで居たといふ、庵室の跡が其處にあるからてあつた。

西行庵は、吉野の山奥といふよりも、寧ろ山蔭になつて居た。道もない杉の林の中を彼方に下つて行つたところが、小さな水音が微かに聞える。其の水音を便りに尙も降りて行くと、或る谷間から、露の玉を集めたやうな、清く澄んだ山清水が、軒に垂れる氷柱(つら)ぐらゐの太さに、とく〳〵と流れて居た。四邊には細長い分厚(ぶあつ)な苔が、一ぱいに密生して居る。西行が朝に晩に手に掬つて、水晶の玉のやうに懷かしんだ苔清水なのだ。

庵の跡は、更に其の下手にあつた。其處は南に日を受けた山の峽になつてゐて、背後には、枝から枝へと錯綜した、奥千本の櫻樹が簇がつて居る。芭蕉は其の西行

草廬の跡の塵を拂つて、靜かに腰をおろした。高く昇つた小春日和の光線が、暖く四邊に降り注いで居る。——何時の間にか彼の心は、五百年前の西行の心と、時間を絶(ぜつ)して直接に、柔らかく溶け合つて居た。さうして、自然詩人の西行が、漂泊から漂泊を續けて、吉野も此の山蔭にまで入つて來たならば、なるほど再び世に出まいとさへ考へたのも、さこそと思ひ遣られた。

三十三

山城から近江路に出て、琵琶湖畔を通る頃は、季は全く冬の領域に入つて、比叡も比良も、其のまた奥の伊吹山も、雪を冠つて巔が白かつた。美濃の大垣に着いて、

木因の家に泊つた。此人は、今ては芭蕉の門下であるが、以前は彼と一緒に季吟の許にゐて、互に尊敬し合つてゐた仲なのだ。

人一倍に種々の人間苦を嘗めながら、而も其の人間苦に毫しも煩はされることなく、卽かず離れずに世の種々相を諦視しながら、自己の努力によつて開拓し得た、俳諧の正風に信仰を置いて、物柔かにして而も一絲亂れぬ、芭蕉の人となりを豫て熟知してゐる木因は、秋の旅路に涼しく痩せた、彼の來訪を圖らずも受けて、今更ながら『詩』其者に接したやうな氣がした。

平素は芭蕉と離れ住んで、書面でばかり往復して居た木因は、此の機會を幸ひと、俳道の上に就ての、種々の質義などを彼に持ちかけた。併し彼は、今こそ自分の門下といへば云ふやうなものゝ、造詣のある木因のことだと思つて、諄いことは言はなかつた。『佛道に達磨があり、道に老子や莊子があつて、眞實なる一路のあることを道破して居る。俳諧も亦この一路に存し、この一路に合ふ道理。であるから、强

ひて言へば、心は句上一路にあるとでも言ふものと思はれます』ぐらゐに止めた。

桑名に出た時には、何處も同じやうな旅宿の樣子に寢飽きて、まだ夜の明けないうちから起き拔けて、濱邊の方へ出かけて行つて見た。伊勢灣はまだ昧爽の裡に、淡く眠の痕を刷いて、潮の頭を白々と瞬いて居た。薄紫の夢の國のやうな、茫乎とした沖の彼方から、寒いが、併しすつきりとした感じのする、曉の風がすわすわと吹いて來る。濕つた砂地に、サク〳〵と足音をさせて、彼は其邊を行つたり來たりした。

熱田に行つた頃は、霙が二三日降り續いて、空の下は一樣に暗く冷たかつた。彼は笠の雫に襟元をすくめながら、今度の旅行には、よく時雨や霙が附きまとふなどゝ思つた。熱田神社に參詣したところが、社殿の屋根は剝がれ、戸板は雨風のために、木目が高く現はれ、勾欄は朽ち果てゝ、周圍には枯れた蓬や、黃ばんだ雜草が一面に亂れて居た。それが霙降る中なものだから、一層荒廢して見えて、痛ましく

思はれた。

名古屋へ來て、暫く滯在して居るうちに、野水、杜國、荷兮といふやうな人達が新たに門下になつた。そして句作の參考になることを、一言でもよいから、何か殘して行つて呉れと、皆が言ふので

「心があまりに高いと、我知らず邪路に入り易いものだし、と言つて餘り低過ぎると、古人の心に觸れる機緣を逸することになるから、其の邊の消息に注意することが大切と思はれます」

また

「自分に秀れたものゝ有ることを、他が認めて呉れぬからといつて、自ら進んで、世の中に乗り出さうとするやうなことは、決して俳人としてすべきことては無いやうに考へます。」などゝ言つた。

思はず永逗留をして居るうちに、歳の暮になつてしまつた。家並の揃つた町々は、

賑かに景氣づいて、餅を搗く音もすれば、煤拂をして居る家もある。途上を往來する人の足並も忙しさうだ。併し一處不住といふ具合に、旅から旅へと行く先々を住家として、放浪を續けて來た彼には、斯うした歳暮らしい、急がしげな情景に接しても、關はりの無い心持で眺められた。

年暮れぬ笠着て草鞋穿きながら

正月一ぱいを、とう〳〵名古屋で過してしまつた。二月になつた。消え殘る畑の雪の間から、若菜が青く覗き出て、南寄りの丘などには、梅の蕾の白く膨らんだのが、ぽつ〳〵見えて來た。

彼は、一度江戸へ歸らうかと思つたが、更に思ひ返して、再び脚を西に向けて、先づ奈良へと志した。

三十四

圓い温和な嫩草山の姿が、奈良の地へ踏み入つた芭蕉の心を、先づ寛かにした。春晝の暖日に、大宮人が櫻かざして逍遙したこの南都の郊外は、大和平原の東北隅に、今尙暢びりした氣分を漾はして居た。南圓堂から、崖を下りての猿澤池。淺茅ヶ原や、業平が『妻もこもれり吾もこもれり』と歌つた武藏野なども近くてあつた。

松や楓樹で陰影を深くした手向山。芝草だけで坊主のやうな嫩草山。大小種々の雜木を以て、山膚を全く包み切つて居る、鬱然とした春日山や高圓山。是等の山々に包まれた平和な一廓に、春日神社や東大寺、其他の古建築物や、佛像、梵鐘等によつて、景勝と宗敎と美術とに彩られた、歷史の國を成して居るのであつた。

彼は其の夜、二月堂に參籠することにした。場所は、嫩草山を背にした、勾配のある高臺に倚つて居た。高い廻廊の欄干に凭れて、前面に展けた早春の平原を見渡すと、近くは法隆寺や夢殿のある古都の跡あたりを初め、遠くは生駒山から、其の左方の金剛山などまでが、夕靄の裡に紫色に煙つて見えた。

春といつても未だ寒い。夜はだん〳〵沈んで行つた。恰度修二會といふ法要の行はれて居る期間であつたので、本堂を出た行僧が、童子に松火を持たせて、廻廊の分厚な板敷を、木沓で物靜かに踏み鳴し、更に石段をコト〳〵と降りて、其の下方にある若狹井へ、閼伽水を汲みに行くのが、夜陰の裡に寒く聞えるのであつた。

水取りやこもりの僧の沓の音

芭蕉は宇治から桃山にかゝつて、京都に出た。その邊は昔、彼の藤堂良忠に仕へて居た青年の頃、主人から季吟への使者に立つて、よく通ひ馴れた道であつた。

そればかりではない。京都は、今から二十餘年前に、言ひ知れぬ懊惱や、止み難

い客氣に悶えながら、郷里を出奔した彼の、初めて身を置いた土地であつた。あとから尋ねて來たお雪と共に、佗しく嬉しく住んだ、若い甘い思ひ出に塗りつぶられて居る土地であつた。

人に道を尋ねるほどのことも入らず、古い記憶を辿りながら、足の向くまゝに、處々方々を歩いて見る其のことにすら、なか〳〵に盡きぬ懐かしさが湧いて來るのであつた。

六七年の間住み馴れた、東山の麓のあの物置のやうな陋屋は、今はどんな風になつて居るかと思つて、或日訪ねて行つて見た。ところが母屋の方は、古びたながらにも、昔の儘になつて居たが、自分の借りて居た小屋の方は、とうに取拂はれて、跡には五六株の果樹などが植つて、其の下に鷄が遊んで居た。貧乏暮しに愛想も盡かさずに、よく面倒を見て呉れた其の頃の老主婦は、十年ばかり前に死んでしまつたさうで、厄介になつた當時のことを、物懐かしく話して見ても、殘つて居る今の家

人達には、あまり感興も無さうであつた。

愛宕山を背にして、澄んだ水の曲折して流れる清瀧川を前にした、極く閑靜な處に、三井秋風の別莊があつた。俳人とは言ひながら、元々富裕な人の持物だけに、建物の構造といひ、庭園の布局といひ、數寄の限りが凝らされてあつて、樓材とした梅林には、雪でも吹きつけたやうに、白い花が咲いて匂つて居た。

嵯峨野、嵐山邊を歩いた。小督局の墓といふのがあつた。苔に蒸された、いかにも女性の奥津城に適はしい小さな輪塔が、椎と楓との木の根に、兩方からぎつしりと挾まれて居た。

丘に登つて、赤松の木立の間から下の方を見ると、屹立した斜面を萬木で包んだ嵐山の影を、岩に昵んだ桂川の淵が、其の藍色の水面に[illegible]して、下流は瀬をなして、渡月橋の方に向いて居る。

堅田の本福寺の住僧の千那といふ人が、芭蕉を其の旅宿に訪ねて來て、門人の一

人に加へて呉れといふ頼みであつた。そして自分は先に寺に戻つて待つて居るから、是非琵琶湖畔の方へも立寄つて貰ひたいと、呉々も言ひ置いて歸つて行つた。

一月ばかり京都に滯在した芭蕉は、伏見に行つて、其處の西岸寺に居る任口を訪うた。轉じて山科から大津に出る頃は、野山の氣色も、全く冬の縛めから解かれて、日射しもぽか〳〵と暖く、土の乾き加減な道傍には、紫の菫などが、雜草に雜つて優しく咲いて居た。

湖畔に添うて、大津から、唐崎、坂本あたりを過ぎて堅田に行つた。そして先に約束した千那を、其の本福寺に訪ねた。千那は心待ちに待つて居たらしく、芭蕉の聲を聞きつけて、先に立つて入口へ駈け出して來て、小僧に盥を運ばせたり、自分で雜巾を持つて來たりした。

堅田は、湖面のくびれた岬のやうな處だ。途中仰ぎつゝ來た比叡山は、稍南に過ぎて新たに比良の峯を迎へて居る。曩には遠く雲煙の間に隱見して居た、湖北の鎮

山の伊吹も、峻秀な自分の姿を惜むやうにしながら、多少近く親しみを見せて來た。

竹生島は、此世のもので無いかのやうに幻に浮んで、湖水の果ては夢見るやうに煙つて居た。水を渡つて來る微温い風は、肌を柔かに撫でゝ、倦怠を覺えるほどの長閑さであつた。

來る道すがら見た、唐崎の松の印象が再び出て來た。石垣の岸邊に、蟠つた太い根を据ゑて、幾丈と長い枝を無數に波に伏せ、綠の影を碧の湖面に眠らせつゝ、春霞の裡に、うつら〳〵としてるのを、振返つて見ながら、だん〴〵遠ざかつて來たのであつた情趣が——。

唐崎の松は花よりおぼろにて

手記したのを千那は見せて貰つて

「湖水の春の心持、それ宛らでございます。」

と言つた。

「これは來る途中で浮んだ興味の、其儘になつて居たのが、今になつてあとから出直して來たのです。」

と芭蕉は云つた。

三十五

春から夏に移らうとする頃、芭蕉はふらりと、江戸に歸つて來た。約一年も會はなかつた門人達は、珍らしさうに、毎日々々來訪して、彼の身邊を圍繞した。彼は旅の疲勞を休める暇も無いほどであつた。

旅から旅へと長日月を閲しながら、森羅萬象の精神を索り、人情風俗の諸相を味

ひつゝ、心の糧を豐かにして來た彼は、其の俳眼の一層深められ廣められたと同時に、其の風格も益々和平に冴えて來た。高く心を持しながら、易く俗に還りつゝあつた。人に對する檣壁といふやうなものが、サラリと拂はれて全く跡を止めずに、而も其の寛いだ奥に、構へて出來ぬ光澤の匂ふやうになつた。

無藝無能にして、たゞ此の一筋に繫がる——といふ彼の心の住家の裡に、門人達の親炙が、より多く集つた。

暫く旅に出たなりにしてあつたものだから、草庵の内外は、ところ〴〵破損して雨が降ると屋根から雫が垂れて、壁や疊を濡したりするので、賴んで手入をして貰つたり、椽の下などへ生え蔓つた雜草を、自分でむしつたりした。

少しく健康を害して、寢たり起きたりする日が暫く續いた。或る夕暮時、靜脈の著しく目立つ細い腕を、緣先の柱に凭らせて、取止めも無い心持で庭を眺めて居た。水の疎通が惡くなつて、處々に赤錆のやうなものを漂はした池の面に、散り殘りの

山吹の花が、折々思ひ出したやうに、二片三片こぼれ落ちた。鼠色の夕暮が、だん〳〵濃くなつて來る。吹くともなしに風が吹く。それが夏ゆゑに、病む身ゆゑに、彼には惱ましかつた。

夕暗は迫つて來て、木の葉の色を包んだ。草花の色を隱した。晝の音と、夜の音との入替はらうとする、靜寂無類の一瞬間がそこにあつた。身體の大儀なことも打忘れて、緣先の丸柱を抱いてゐた芭蕉は、庭前の景物が自分であるか、自分が庭前の景物であるか、渾然として主客の差別を超え、物我一枚の寂しい境に沈んだ。

古池や蛙飛込む水の音

三十六

永い夏日が漸く過ぎて、朝夕涼氣立つた頃、芭蕉の健康はすつきりとして來た。宛ら、通ひ初めた秋の氣配と、秋を喜ぶ彼の心とがぴたりと抱合して、爽かな蘇りを齎したものゝやうであつた。

まだ白(しろ)みの失せぬ初物(はつもの)の栗などが出て、芒の穗の銀色がゝつた頃、秋の心を集めたやうな十五夜が來た。其夜は珍らしく空が晴れ渡つて、月色が非常に良く、まるで晝のやうに明るかつた。

其角と仙北とが、月に浮かれてやつて來た。

「大川へ出て、月見を致しませう。」

「舟はお庭の岸まで來て居ります。」

二人は口々に言つて、芭蕉を誘つた。先刻から、呀ぇ渡つた月光を仰いで居た彼は、直ぐに同意した。草庵を出て、庭の外圍を水岸の方に出て見ると、恰度滿潮時なので、江上は高くもり上つて、用意された舟が、ゆらり〳〵して居た。舟の中に

は、毛氈が敷かれて、重詰や酒樽、風爐などが持込まれてあつた。

月の雫を棹先に散しながら、舟は小名木川から、萬年橋の下を抜けて、大川の本流に出た。大橋のあたりには、他にも月見の舟らしいのが、幾つも見えた。中洲の阿部豐後守の裏まで來た。

兩岸に並んで居る人家の屋根は、ところ〴〵にある樹木と按配されて、高く低く、方形や圓の種々な線樣で青い夜空を劃つてゐる。月の光を正面に受けた家の燈火の影は淡く、月の光の隈になつた家の燈火の影は赤い。水蒸氣の中に紛れて、音も無く忍ぶやうに、流れる樣子も無く、緩やかに流れて居る水の上を、舟は辷るやうに右に行き左に行きした。川上も、川下も靜かに水氣に咽んで居る。

醉うて來た其角が、名月や——名月や——とだけ口吟んで、どうにも一句を成しかねて居ると、扇でぱさ〳〵と風爐の火を煽いて居た仙北の從者が

「名月は汐を流るゝ小舟かな——では句になりますまいか。」

と言つた。

「名月は汐を流るゝ小舟かな——大層佳い句だ。」

と芭蕉が褒めた。其角は、してやられたといふやうな顏をして、仰いで、酒臭い息を、天邊の大月に吹きかけた。

夜露に濡れかゝつた舟を、先に來た方へ漕いで、そろ〳〵歸りかけた頃は、もう他の月見舟は居なかつた。水と月とが微妙に觸れ合つて、たゞ江上は廣かつた。

草庵に近い河岸まで、再び舟で送られて、芭蕉が歸つて來た時には、夜は大層更けてしまつて、初め東の空の方に、長い時の間遍照してゐて、次に中空の邊にまた緩くりといざよつて居た月が、今ではもう大分西の方に傾いてしまつた。

彼は庵の戸をしめて、床に入つて寢たが、どうしたものか、一向に眠れない。目も心も冴えるばかりだ。戸の隙間から入る月の光は、明るい縱の一線を障子に引いて居る。虫も夜明けまで鳴きつゞける樣子だ。

「一年一度の良夜だ。明け方まで眺めるのも面白からう。」

彼は寢床から起き出した。戸を明けた。五更の夜風が、蒲團に温まつた肌に、すわ〳〵と沁みた。下駄をつゝかけて庭に下りた。

芭蕉の葉は露に濡れて身顫ひして居る。月色は極度に冴えて、纏うて居る夜着の縞目までが、鮮明に見える。鏡のやうに照る池の面には、微生物でも浮游するのか、底の泥が氣孔でも開くのか、時々小さな波紋などが出來る。彼は漫ろに池の周圍を回つた。雜草に喞く虫が鳴き止む。止めて、過ぎるとまたそろ〳〵と鳴き出す。

天地は白く更け切つた。夜の色といふよりも、もう既に曉の色だ。

明月や池をめぐりて夜もすがら

三十七

日に〳〵涼さが加はつて、袷でも寒さを覺えるやうなことが、たび〳〵あるやうになつた。朝など縁に立つと、足裏が冷やりとして、吐く息は空間に白く見えた。

前の日に大川で舟遊した彼は、また後の夜の月色を見たくなつた。

「常陸の鹿島へ出かけよう。」

鹿島の根本寺(こんぽんじ)には、佛頂和尚が隱棲して居るのであつた。供には曾良と僧の宗波とを連れた。甲府の知人から贈つて呉れた、檜細工の笠を持つた。

下總通ひの舟に便乘して、小名木川を過ぎ、更に江戸川を溯つて、下總に出た。其處で舟から上つて、桔梗や女郎花の咲き亂れた中に、野放しの馬などの遊んで居る路を辿つて、利根川縁の布佐に一泊した。

翌日はまた舟に乘つて流を下り、利根川の水と霞ヶ浦の水との相逢ふあたりを、潮來(いたこ)の鼻を遠廻しに鹿島の大舟津に着いた。途中で雨に降られたので、寺に和尚を訪ねた時には、ずぶ濡れになつて居た。

和尚が深川に居た頃、其の會下に參じて、『近日何の所有ぞ』と問はれ、『雨過ぎて青苔を洗ふ』と答へて以來、絶えて久し振りの面接であつた。

和尚は相變らず穏々として居た。爲す無くして爲さゞるは無しといふ風に薫つてゐた。雑談の裡に只親しんで居るだけで、それだけで、心の底は掘抜井のやうに、深いところから自づと澄み上つて來るのを覺えた。そして『俳諧の眞の姿に遊ぶ時は、道は古今に通じ、不易の理を失はずして、流行の變に渡る』といふ日頃の信條を、無言の中に一層強められるやうな心持が芭蕉にはした。

夜になつても雨は止まなかつた。空は墨を流したやうに黑い。月さへよければ。東一里の道を、鹿島灘の方へ行つて見たいとさへ思つたのであつた。下總の犬吠岬から、遠く常陸の那珂の港まで、殆んど一直線を引いて、船舶すら寄せつけぬやうな、男性的な九十九里濱に立つて、牛の背のやうな大きな波浪の一つ〳〵に、月の光りの盛り上る放膽な外洵の明るい夜色を眺めたかつたのであるが、雨では何うにも仕

樣がなかつた。

遲くまで和尚と話し込んで、やがて月のことは諦めて寢床に入つた。深更の寺院の境内は、森閑として音の無い世界であつた。身内の動悸までが能く聽取れる。たゞ時々梟の鳴くのが、雨夜の空氣に呆けて聞える。

曉近くなつた頃、フト目が覺めた、見ると締めた扉の間から、月の光が薄すりと忍び込いんで居た。芭蕉は見つけ物でもしたやうに、目をこすりながら、床から起き出た。そして寢覺め夜深く戀人とでも會ふやうな心持で、そつと戸を明けた。

雨のポト〳〵と雫する墓場の上の立樹の間から、暈をかぶつた月が、ぼんやりと濕つた顏を出して居た。彼は夜の更けきつた、冥府のやうに靜寂な、寺院の戸口に獨り佇んで、自分が月の座に行つたのか、月が自分の前に下りて來たのが分らぬやうな、渺とした心持で眺めて居た。

黑い雲の一陣がまた催して來た。そして拔足差足するやうに、意地惡く詰め寄つ

て來て、また月をたうとう呑んでしまつた。明るかつた視野や、すうつと暗く刷かれた。

月早し梢は雨をもちながら

鹿島から歸つて來た後、彼は暫く草屋の裡に引込みがちにして居た。

木屑を綴つたやうな衣を着て、木の枝や緣の下などに、寒さうにぶら下つて居る、小さな簑虫が芭蕉は好きであつた。本當に鳴くのか鳴かないのかは知らないが、水のやうな秋の夜の空氣に、一種幽かな旋律を漾はせる蟲の音。あれが簑蟲に違ひないと思つた。形が見すぼらしく、聲がおぼつかなく、鈴蟲や松蟲のやうな氣の利いた音樂を知らず、虫の中でも取分けて無能な蟲らしいのが、哀れげに可愛かつた。また自分の境涯に似たところがあるやうに思へて、同じ地上の生物に通つた寂しさを以て、其の鳴音に沁々と彼は耳を傾けた。併し其の寂しさは、決して悲しみの寂しさではない。物皆と一如になる樂しい寂しさであつた。

三十八

常に萬有の奥底に、脈々として流れて止まぬ、幽渺な詩の世界に對して、身も安からぬまでに思ひの絕えぬ芭蕉は、十月の下旬に再び關西に旅立つことにした。いま日が射して居るかと思ふと、直ぐに時雨が催したり、一方が晴れたまゝに、一方が曇つたりする、空模樣の定まらない頃であつた。

何時もの通り、旅立つと言つても、萬事が無雜作であつた。たゞ慾としては、今夜は寢心地のよい宿に當りたいものだ。または足に適ふ草鞋を得たいものだ、と思ふくらゐのところだから、風葉の行方知れぬやうに、すべてが至つて氣輕だ。それ

でも知人や門下の人々は、それ〳〵集つて來て、句を寄せるものもあれば、草鞋錢や、紙子、帽子などを呉れるものもあつた。そして暫しの別れだと言つて、小宴などまで張つて呉れた。

野山の紅葉は散り盡して、河川の水も寒く減りがちに、天地は既に確實に冬のものであつた。尾張の鳴海まで行つた時に、數日前に通り越して來た、三河の保美に居る杜國のことが思ひ出された。杜國は尾張の藩士で、お米切手の掛を勤めて居たのだ。極めて情誼に厚い、物靜かな好い人物なのだが、いつぞや上役の夫人との間に、不義の關係を結んだとかいふ嫌疑を受けて、それがために藩から遣責を蒙つて保美の伊良古崎に引込んで、侘しく蟄居の姿で居るのだ。

豫て其のことを耳にして居た芭蕉は、自分も伊賀に居た若い頃、女性とのことに就て、意外な苦い經驗を幾度も嘗めたことがあるだけに、さうして杜國の人物を知つて居るだけに、切實に同情されて、江戸に居ても、折々書面などを出して、それ

となく慰めたりして居たのであつた。氣の毒な杜國の俤が目に浮んで來た彼は、其處からまた後戻りして、訪ねて見る氣になつた。

一緒に供をするといふ尾張の越人を連れて、二十五里の途を引返した。二人だけに大分道が捗つて、其の夜は、矢矧川の海に注ぐ處の吉田に一泊した。ところが宿屋の汚ないのはまだしも、出して呉れた蒲團が薄くて、渥美灣から吹きつける冬の風が、戸の間から容赦も無く侵入して、夜更けになるほど寒さが增した。けれども久振りて會つて、自分に同行して呉れる越人が傍に寢て居る。

寒けれど二人寢る夜ぞたのもしき

翌る朝は殊に寒氣がひどかつた。庭先には霜柱が立つて、屋根や樹木は眞白にちか〳〵して居た。熱い味噌汁で食べた朝飯が、大層うまかつた。

對岸に位して居る伊良古岬までは、なか〳〵途が遠かつた。其の日は殆んど、半圓をなした灣に添うて歩いた。草臥れたので、途中から馬を傭うた。太陽の光線は

遠く薄く、海から吹きつける氷のやうな潮風は、海岸の砂を飛ばし、馬の鬣を靡かせ、袖で顔を蔽ふやうなことも度々であつた。けれども旅を樂しむ彼の心は、冬日、風、砂、海水、岩壁其の他すべての物象との間に、一線すら引き得ないほど、親しく或る妙諦の裡に溶け合うて、何等の殘滓をも止めないのであつた。

冬の日や馬上に凍る影法師

杜國の假住ひして居る家は、見すぼらしいほど小さかつたが、土地が狹いだけに直ぐに分つた。門口に立たうとすると、恰度彼が縁側に出て、光線の薄い冬の日を背中に浴びながら、障子の切貼りをして居るのが、低い垣根越しに見えた。芭蕉は顔を合せずして先づ、杜國の杜國らしい懐かしさを見た。

聲をかけられて、杜國は振向いて此方を見た。其處には芭蕉と、豫て面識のある越人とが、旅姿で立つて居るのであつた。彼は戀人にでも會つたやうに、初心らしく顔を染めて、二人の前に手をついた。

「昨夜は二人して、此の向側の吉田に一泊しました。川の落口だけに、なか〳〵好い處だと思ひました。」

芭蕉は後戻りした餘德を言つたつもりだ。

「さやうでございましたか、あれからは海岸傳ひの、至つて惡い道で、殊に風模樣で、さぞ御難儀でございましたらう。」

「其の後はお變りもありませんか。」

「有難うございます。お便りいたさうと思ひながら、實は先頃少しく病氣をいたしまして、暫く寢んでなど居りましたので、つい御意も得ず、失禮に打過しました。」

なるほど杜國は未だ病氣上りらしく、顴顁のあたりには、青い筋が仄見えて、顏色もすぐれず、頰も幾分かこけて居た。

「どうも元氣が無いと思ひました。病氣は後が大切ですから、精々養生をなさい。殊に日增しに寒氣の加はる折ですから、一層大事にしなければなりません。」

「能うこそお越し下さいました。」

絶えて相會はなかつた父と兄とにても、訪ね來られたやうに涙ぐんで喜んだ。

「何うしておいでかと、急にお目にかゝりたくなつたので。」

芭蕉は彼が可愛いなつた。

「前以てちよつと、お便りでも下さいますれば、途中までなりと、お出迎へ致しますものを。」

「例によつて、氣儘にやつて來ました。」

越人が傍から言葉を挾んだ。

「師匠には江戸をお立ちになつて、尾張までおいてになつたのでしたが、貴方を思ひ出されて、此地までお戻りになつたのです。」

「添けなうございます。」

杜國は尙更恐縮した。

「有難う存じます。何しろ御存知のやうな目下の境遇に居りますので、面目次第もございません。」

氣の小さい杜國は、そんなことを氣にかけて、病氣などになつたのかも知れないと思つて、芭蕉は尙更氣の毒に思つた。

「雲が晴れてから、月に光が附け加はるのではありません。晴れても曇つても、元から月はちやんと空に懸つて居るのです。知るものは皆知つて居ます。下らぬことを氣にして、健康を害ねぬやうに賴みます。」

杜國は涙ぐんだ。

「私も御旅行のお供をいたしたいのでございますが、自由になりませぬ身の上で、殘念でございます。來年になりますれば、何處へなりとお供が出來ます。」

「私は是から名古屋、伊勢を經て鄕里に歸り、其處で年を越して、來春になつたならば、吉野の花に遊びたいと思つて居ます。其時は前以て打合せをして置いて、是

非一緒に出かけませう。」

杜國が心を盡して止めるので、三四日滯在した。そして風の無い靜かな氣の日に、岬の砂濱へ行つて、いらこ白といふ碁石に似たものを拾つたりした。

三十九

熱田を經て、久し振りでまた名古屋に滯在した。門下の人々にも會つた。大垣邊からもそれ〳〵訪ねて來た。中には

「自分に俳名をつけて見ましたが、どうも氣に入りませんから、何ぞお選びになつておつけ下さい。」

などゝ言ふ者もあつた。

「俳名は必ずしも凝つた文字に及びますまい。たゞ口に呼んで清く調ひ、字に書いて見て、形のすつきりとしたのが宜しいでせう。」

また

「句作の參考に讀むべき書物は、何が一番適して居りませうか。」

と問はれて

「一口に申せば、古書撰集に眼を晒すのがよいと思ひます。」

などゝ答へた。

約半ヶ月ほど滯在して、身に滲む風の益々寒くなつた十二月中ば頃、越人と別れて、芭蕉に一人伊勢に向つた。途中桑名を經て、日永の里といふ處へ行つた時分に、馬を頼んだ。間も無く坂に差しかゝつた。

「これは何といふ坂かな。」

「ハイ。杖突坂と申します。」

馬士と話を交はす拍子に、芭蕉は過つて馬の背中から、ずる〳〵とこけ落ちた。

「飛んだ粗忽を仕出かしました。」

馬士は慌てゝ彼を抱き起した。そして頻りに詫を言ひながら

「こん畜生、氣をつけろい。」

と怒鳴りながら、手綱の端で馬の横面を、ピシリ〳〵と撲つた。馬は避けるやうに顎をしやくりながら、鼻の孔を大きくして上を向いた。

「私の不注意だ。馬を折檻するには及ばない。」

「お怪我はありませんでしたか。」

「氣遣ひない。」

少しは痛い箇處の無い譯でもなかつたが、輕く言つて置いた。そして馬から落ちるのも、面白いことかも知れないと思つて、我ながら苦笑された。

伊賀の土地を踏んだ時には、歳暮に間が無かつた。故國で最も高い鈴鹿の山脈は雪を催して居た。町家の店頭には、鹽鮭がぶら下つて、街上には白い紙片などが、風にクル〳〵と舞つたりして居た。

家の人達は、田舍に居る所在無さに、老いることにのみ維れ努めて居るかのやうに老いて居つた。殊に兄は完全な翁になり切つて居た。其の姿を見るにつけ、自身のことも沁々思ひ合されて、常に流轉して止まぬ悲哀の、執拗に裏づけられて居る人生の風浪に、吾も他も共に漂つて居るのであることを、看過する譯には行かなかつた。けれども彼のその感慨は、涙に徹した後から生ずる、從容とした感傷であつた。

「會ふのは何時に限らず嬉しいが、今度は年の暮だけに、一層懐かしい心持がします。よい時に歸つて貰ふことが出來ました。」

「今年は御一緒に、除夜の鐘を聽きながら、緩くりお物語をいたしたう存じます。」

戸外には、途上を歩く人の足駄の音が、凍てついた地面に、カラコロと冴えて聞えた。

「年老いた兄弟が、一つ家に相寄つて、樂しく年越しをするなどゝいふことは、此上無い有難い仕合だ。」

「お互に父母の膝元に居りました、遠い昔のことが思はれます。」

「よい正月が來るに違ひない。樂しく雑煮が祝はれます。」

「人は幾つになりましても、正月と聞きますと、長閑な若い心持に呼び返へされるものでございます。」

「斯ういふ喜びも、皆、地下の父母のお引合せだ。佛の思召だ。忝けない。」

「亡くなられた兄上と三人揃うて、髪を整へ衣服を改めて、兩親の前に居並んだ昔のことが思ひ出されます。現在の私達よりも、もつとお若かつた父や母のお姿も、目の前にあり〳〵と浮んで來ます。」

平素遠く相離れて居る、知命を越して兄と、不惑を過ぎた弟とは、三十五年も前の純な無邪氣な青少年に還つて、心と心とで手を握り合つた。

故郷や臍の緒に泣く年の暮

お雪も、小じんまりとした老婦になり澄して居た。そして初め無く、終り無い天地の間に、芭蕉と時代を同じくして生れ來て、萬人の中に撰ばれたる只二人となつて、相知る仲となつたのを、何物にも代へ難い宿世の縁と思ひ込んで、元來『獨』に處すべき天分にある芭蕉の身世を能く理解して、自分の生涯の殆んど全部を、日蔭者のやうな立場に置いて來たことに些しの悔も殘さず、忍従に終始して、而も其の間に、自分に相應した安心を握つて居ることを、物靜かに言外に言つて居た。

芭蕉は多くを言はなかつた。お雪も多くを言はなかつた。たゞ其處には、心と心との接觸があるばかりであつた。おふさも大きくなつて居た。言葉は少なかつたが彼は心の中では、娘を抱きすくめた。

四十

寒雅な一種獨特の故郷の景色の裡に、芭蕉は暢々とした心持て初日を仰いだ。まだ松の内の或日の午後であつた。門下の桃隣と半殘とが、屠蘇の機嫌でやつて來て、彼を無理矢理に引張り出して、同じ門下の土芳の家に連れ込んだ。

盃の數の重なり行くうちに、どこか、其角に似たところのある桃隣が、そろ〳〵威張り出した。

「お聞き下さい、暮の忙がしい時に、俳諧の小集を催したのです。風流でございませう。點取りが初まつたのです。結果は私が一番勝を制しました。」

土芳も醉つて來た。默つてばかりは居ない。芭蕉の豫て言つて居ることを、栖にして言ひ出した。

「師匠も豫々敎へられる通り、點取りといふことは誰もすべきでない。まるで賭博のやうなものだ。今日は誰が一番であつた。明日は誰だらうと、其のことにばかり氣を呑まれて、我と我が句の良否に目が眩み、眞に俳諧の精神のあるところを失つてしまふ。」

「偉らさうなことを言ひなさるな。あんたの言ふことは、たゞ師匠の口眞似だ。現にあの時も同席して、點取に夢中で居たではないか。」

「私が厭だ厭だといふのに、無理にあんたが引張り込んだのだ。」

「人聞きの惡いことを言はぬがよい。」

「議論は無い。師匠の御意見を伺つて見なさい。」

平素親密な間柄の二人は、怒つたやうな態度を互に構へながら、讓らうとしない。

芭蕉は微笑した。そして遠慮無く言つた。

―折角の議論だが、桃隣子に賛成が出來ない。こんな話がある。天竺に妻を二人持つた男があつたといふことだ。一人の妻は年が若く、他の一人は老けて居た。男は年をとつた妻の方へ行く時に、當人の氣をかねて、黒い毛を拔いたさうだ。また後で若い妻の方へ行く時には、其の女の心をかねて、白髮を拔いたさうだ。斯うして双方に氣兼をする度の重なるうちに、黒い髮も白い髮も、兩方共拔き盡してしまつて、つる〳〵した坊主頭になつてしまつたといふことだ。點取は恰度この諺に似て居る。」

桃隣は聞いて頭を搔いた。一座は屁の無い笑に落ちた。

車坂町の東南隅に位した麥畑の奥に、豫て昵懇な意專老人の、西麓庵があつた。二三日其處に起臥した芭蕉は、正月の九日に、城の西の丸の彼方にある、風麥の亭を訪ねて行つた。

廣小路から東町にかゝり、更に北に向いて、東大手の黒門を潛り、左に曲つて大名小路から、扇の芝に添うて西に歩いて行つた。

春といつてもまだ寒い。布引から起伏して鈴鹿に連なつた山塊には、殘雪が白かつた。太鼓橋を右に見て、更に京口橋を渡ると、風麥の家までは、もう幾らも無かつた。

風麥も、其の妻も、思ひがけぬ芭蕉の來訪を喜んで、左右から手を取るばかりにして、内に招じ入れた。

垢拔けのした、顏形のはつきりとした、立居振舞の落ちついた、田舍に目立つ風麥の妻は、酒や肴を運んで、如才なく彼を歡待した。風麥も

「俳諧では貴方樣がお師匠ですが、飲み方にかけては、私の方が一二枚上かと存じます。」

などゝ言ひながら、執拗くなく而も間拔けのしない酌の仕方をした。彼はつい好い心持に醉つてしまつた。

貼り立ての眞白い障子を明けて出て見ると、手水鉢には、まだ薄い氷が圓く解けたなりに浮いて居て、庭先の梅も、紅白の分らぬほどに蕾が固かつた。見渡す彼方の山や野も、まだ冬の景色から脱し得ずに居た。

春立ちて未だ九日の野山かな

風來は、綺麗な硯箱と、立派な短冊とを持ち出して、記念に殘して呉れと言つて肯かなかつた。妻も側から、頼みを叶へて呉れなければ、恨に思ふとまで言つた。彼は快く承知して、一筆に其の句を書き終ると同時に、

「あまり御馳走になり過ぎました。御無禮ですが、暫く寢まして下さい。」

と言つて、強ひられ過ぎて醉つた身體を、おとなしく其處へ横にしてしまつた。

四十一

矢張りまだ早春らしく寒い日であつた。大層佳い梅の林があるといふので、山の麓の矛野（よーの）といふ村落に芭蕉は出かけて行つた。町を出はづれて、大分歩いたと思ふ頃、行手の山の襞になつて居る處に、數名の人夫らしいのが、鋤鍬のやうなものを振り上げて、頻りに何か採掘して居る樣子だ。

曲折した畑の畦や野の路を辿つて、其處へ行つて見た。

「何を掘るのかね。」

「亞炭（うに）を掘り出すのです。」

「聞いたことが無いが、何に使ふ物かね。」

「炭のやうに燃料にするのです。」

人夫の一人が斯う言つて、其の亞炭といふものゝ一塊を、彼の前に突き出した。手に取つて能く見ると、品質は一種の化石の樣な物で、風が吹くと異樣な臭氣がする。

「本草には石炭といふことが誌してあるが、其の形といひ、其の用途といひ、稍そ